

【令和5年度版】

「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」

委託事業事例集



令和6年3月
総合教育政策局
男女共同参画共生社会学習・安全課
安全教育推進室

<目 次>

○有害環境から子供を守るための推進体制の構築(ネットモラルキャラバン隊)

アディッシュコンソーシアム

○有害環境から子供を守るための推進体制の構築(ネット対策地域スタートアップ事業)

・京都府

・アディッシュコンソーシアム

・公益財団法人兵庫県青少年本部

○青少年教育施設を活用したネット依存対策推進事業

・岐阜県

・静岡県

・山梨県

・公益財団法人兵庫県青少年本部

○依存症予防教育推進事業

・特定非営利活動法人全国薬物依存症者家族会連合会

・公益財団法人横浜YMCA

インターネットの光と闇

インターネットの光と闇について東京（オフライン）、全国（オンライン）でのシンポジウムを開催。保護者、教職員、児童生徒を対象に講演、ワーク、パネルディスカッションを行いインターネットのリスクと対策方法を学ぶことを目的に開催。

（実行委員会の構成）

委員：
上沼 紫野（虎ノ門南法律事務所 弁護士）
松岡 英治（安心ネットづくり促進協議会 部長）
森 雅人（日本刑事技術協会 理事）
菅原 ゆりあ（総務省 情報流通行政局 情報流通振興課 情報流通適正化推進室 インターネット 利用環境整備係）
杉之原 明子（みんなのコード COO）

事業の概要

主に保護者、教職員、児童生徒を対象としたネットリテラシーに関するシンポジウムの開催

- ・対象：東京、全国
- ・実施地域：東京（オフライン）、全国（オンライン）
- ・実施主体：アディッシュコンソーシアム
- ・対象者：保護者、教職員、小学生、中学生、高校生

事業のねらい

昨今インターネットがきっかけとなる事件や事件にならないトラブルが増えています。インターネットが便利すぎるが故に依存症や課金トラブル、炎上などの被害に遭うことも少なくありません。一方でインターネットは"上手に"使えば多種多様な人と関わることができ、子どもたちの可能性を広げてくれるものです。デジタルネイティブである子どもたちはこれまでもこれからもインターネットと関わる必要があります。本シンポジウムではそのような子どもたちや子どもたちを見守る保護者、教職員を対象に「インターネット依存度チェック」「パスワードチェック」などのワークや有識者のパネルディスカッションを通して、インターネットのリスクや事件を認識し、安全なインターネットの使い方を学ぶシンポジウムとする。

事業の内容

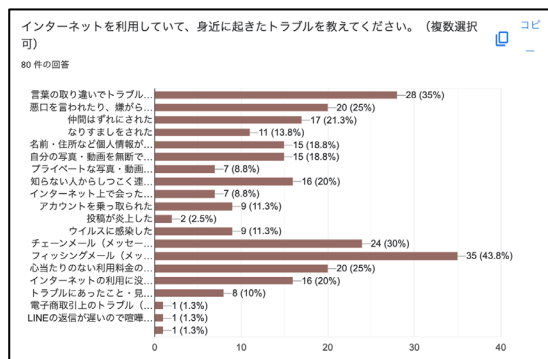
本シンポジウムでは実際のトラブルに即した講演、パネルディスカッションが行えるように事前アンケートを申込者に実施。

■対象（80名）

本シンポジウムに参加申込をした教職員、保護者、児童生徒、その他教育関係者、企業

■アンケート結果

「フィッシングメール（メッセージ）が送られてきた」（43.8%）
「言葉の取り違いでトラブルになった」（35%）
「チェーンメール（メッセージ）が送られてきた」（30%）
「悪口を言われたり、嫌がらせを受けた」（25%）



本事業の問い合わせ先

アディッシュコンソーシアム
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-21-8 ヒューリック五反田山手通ビル6階 TEL:03-5759-0334
担当：安達（sg-info@adish.co.jp）

POINT 1

参加者参加型の基調講演

「インターネット依存度チェック」「パスワードチェック」などワークを実施することで一方的な基調講演と異なる形式に。日常生活を振り返るワークになった。

POINT 2

アンケート結果に基づいた事業開催

アンケートから基調講演やパネルディスカッションの構成を決定。これにより「参考になった」と答える人が100%という結果になった。

POINT 3

専門家によるパネルディスカッション

元刑事、弁護士などの専門家によるパネルディスカッションにより、多角的な視点からネットトラブルについての議論を行った。

第一部では「インターネットの光と闇」というテーマでインターネットを利用することの可能性とリスク、トラブルについて理解することを目的に基調講演を行うとともに、「インターネット依存度チェック」「パスワードチェック」など日常生活を振り返られるワークを実施した。第二部では第一部の基調講演で出たネットトラブルを有識者の視点から深掘りした。さらにネットトラブルから身を守るための日常生活でのルール作りやインターネットとのバランスについてパネルディスカッションを実施した。

■「インターネットの光と闇」ネットリテラシーシンポジウム

日時：2023年8月26日（土）13:30~16:30
場所：立正大学附属中学校高等学校 馬込キャンパス 行学ホール【多目的ホール】
形式：オフライン・オンラインでのハイブリッド

・第一部 基調講演

テーマ：「インターネットの光と闇」
講師：金城 明子（アディッシュプラス株式会社）

・第二部 パネルディスカッション

テーマ：「インターネットの光と闇」
ファシリテーター：杉之原 明子（アディッシュ株式会社取締役）
パネラー：松岡 英治（安心ネットづくり促進協議会 部長）
上沼 紫野（虎ノ門南法律事務所 弁護士）
森 雅人（日本刑事技術協会 理事）
菅原 ゆりあ（総務省情報流通行政局 課長補佐）

・第三部 質疑応答

事前アンケートや当日寄せられた質問に回答



事業のねらいに対する成果

本シンポジウムの参加者アンケートでは、全体の満足度が4.2%と高い水準だった。基調講演については「とても理解しやすかった」「理解しやすかった」が100%、「非常に参考になった」「参考になった」が100%、パネルディスカッションでは「役立つ情報が多く含まれていた」「いくつかの情報が役立つと感じた」が91.6%であった。参加者にとって新たな知識や事例を学ぶ機会が創出できたと言える。また、狙いである「安全なインターネットの使い方を学ぶシンポジウムにする」については「とても有益な話が聞けました。生徒や自分の子供に対しても大変参考になりました。」「必ず子どもと話し合ってルールを決めることが大切ということであらためて認識しました。」などの声が寄せられ、トラブルを防ぐルール作りについて言及がされており、一定の成果をあげることができた。

課題と今後の展望

本シンポジウムの課題は機材の関係で①音声が届かなくて②子どもを守るための教材や技術があれば教えて欲しいなどの意見があったことである。①に関しては事前のリハーサルで確認していたが参加者人数が多い場合の聞こえ方を確認することができていなかった。今後、有線LANを使うなどの対応を行う。

②に関しては知識や事例は提供できたものの、フィルタリングサービスや教材の知識の提供ができなかった。今後、今回提言した「ルール作り」に加え日常生活で取り入れやすい技術についても有識者と確認し、基調講演やパネルディスカッションで提供をしていく。

~有害環境から子供を守るための推進体制の構築~ in大阪

SNSやコミュニティサイトを通じて、犯罪に巻き込まれる中高生の数が増えてきている。この現状を踏まえて、実際の被害事例を基にしたトラブル防止策とネットリテラシーの向上を目指す参加型のシンポジウムを開催。

(実行委員会の構成)
委員：
吉岡 良平 氏：草の根サイバーセキュリティ推進協議会 常務理事
市野 敬介 氏：企業教育研究会 事務局
堀 浩人 氏：総務省 近畿総合通信局 電気通信事業課 課長
米田 謙三 氏：早稲田摂陵高等学校 教諭

事業の概要

主に保護者、教職員、児童生徒を対象としたネットリテラシーに関するシンポジウムの開催

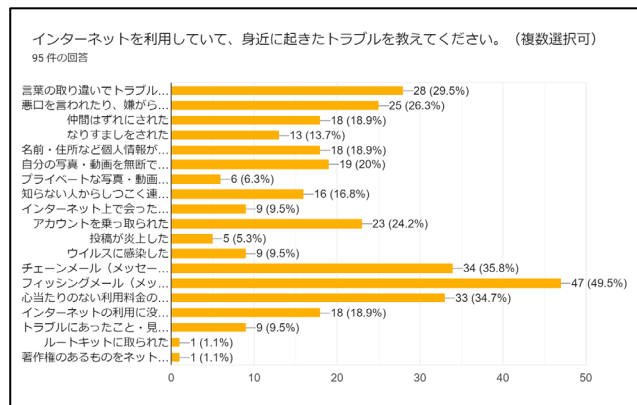
- ・対象：大阪、全国
- ・実施地域：大阪（オフライン）、全国（オンライン）
- ・実施主体：アディッシュコンソーシアム
- ・対象者：保護者、教職員、小学生、中学生、高校生

事業のねらい

SNSやコミュニティサイトを通じて、犯罪に巻き込まれる中高生の数が増えている状況を踏まえ、実際の被害事例を基にしたトラブル防止策の普及とネットリテラシーの向上を目指す。「出会い」「炎上」「アダルト」「課金」「依存」「詐欺」などのトピックを「犯罪」としての観点から、被害者及び加害者の両面から深掘りする。リアルな事例を交えた講演、ワークショップ、そしてパネルディスカッションを通じて、参加者が積極的に議論に参加できるようなプログラムを提供することを本シンポジウムの趣旨とし、各分野の専門家による知見に触れ、理解を深め自身の行動に繋げる

事業の内容

本シンポジウムでは、より実践的なトラブル防止策を参加者に提供できるよう、参加申し込みと併せて事前アンケートを実施。「インターネットを利用して、トラブルにあったこと・見かけたことはありますか。」という設問に対し、80.0%があると回答。経験したことがあるネットトラブルについての設問では、「フィッシングメール（メッセージ）が送られてきた」の回答が49.8%で最多、ついで「チェーンメール（メッセージ）が送られてきた」が35.8%、「心当たりのない利用料金の請求を受けた」が34.7%という結果であった。「投稿が炎上した」等の回答が少なく、詐欺やニセ・誤情報の被害申告の割合が高くなっているのは、申込者の61.1%が教職員であったことに起因している。



また本シンポジウムで取り上げてほしい話題については、「保護者への啓発方法」「情報を批判的に読み取る能力の育成」「夜間の使用制限について」といった回答が寄せられ、教職員や保護者の視点における児童生徒への啓発に関する話を希望する声が寄せられた。

本事業の問い合わせ先
アディッシュコンソーシアム
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-21-8 ヒューリック五反田山手通ビル6階 TEL:03-5759-0334
担当：鈴木 (sg-info@adish.co.jp)

POINT 1 聴講者参加型の基調講演

前回好評だった「インターネット依存度チェック」のワークを実施することで、一方的な基調講演とまらない形式に。聴講者が我が事として、日常生活を振り返る時間をつくった。

POINT 2 前回の実施後アンケートの声を反映

前回の東京会では、学校現場で活用できる事例や対策を希望する声があがっていたことを受け、学校現場（現役教諭）の有識者を有識者の1人に加えた。

POINT 3 各方面の有識者による議論

パネルディスカッションでは、行政・学校・企業・学識者、立場の違う有識者より、様々な視点からの議論の場を提供した。

第一部では、子どもたちのネット利用の実態と環境を知り、その対策を考えるきっかけになるような問題提起の講話を実施。第二部では、参加者からの事前アンケート結果を元に、各分野の専門家による知見に触れ、さらに理解を深めた。構成要素としては、第一部で光から闇へ。第二部のパネルディスカッションでは闇から光へと危険性を知り、依存度チェックなどで自分自信を確認し、その上でデジタルシチズンシップに焦点を当てた。

デジタルシチズンシップに関する内容では、社会環境の変化に伴う高校生のデジタル利用環境の進化、都市部と地方のインターネット関連トラブルの地域差と啓発の必要性、総務省による青少年のインターネットリテラシー向上活動、コロナ禍における学校環境の変化とオンライン教育の重要性、不適切な投稿や炎上のリスクへの意識向上、児童ポルノに関する法の厳罰化と正しい情報提供の必要性が議論され、デジタル化社会におけるデジタルリテラシーの向上が重要であると強調された。

講演
「インターネットの世界が与えるもの、奪うもの」
～今そこにある危機とは～
アディッシュ株式会社 講師 安達堅斗

パネルディスカッション
テーマ：起こりやすいトラブル事例と伝えておきたいポイント～子どもたちが健全にインターネットを使える環境を目指して～

早稲田摂陵高等学校 教諭 米田 謙三氏
草の根サイバーセキュリティ運動全国連絡会 常務理事 吉岡 良平氏
企業教育研究会 事務局 市野 敬介氏
総務省 近畿総合通信局 電気通信事業課 課長 堀 浩人氏



事業のねらいに対する成果

実施後の参加者アンケートでは、理解度、満足度とも90%以上と高い評価だった。日常に役立つ情報だったか、新たな知識を得られたかについても評価は高く、総じて満足度が高かった。参加者の声で「デジタルシチズンシップ（以後DCと称する）」の意味や定義、捉え方、ネットリテラシーとの違いなどとても参考になったと反響が大きかった。「スマホ依存についての設問に答える中で、日頃の自分の行動を振り返る機会になり、改めようという気持ちになった。」という声もあり、狙い通りの成果は得られた。

課題と今後の展望

事後のアンケートにおいて、「デジタルネイティブの精神的特徴」「海外との比較」「子どもたちの生活に役立つメタバースの可能性」「ネット長時間化を予防するための子供向けワークショップ」といった具体的なテーマの要望が得られたため、次回以降に繋げていきたい。また、発言者以外の登壇者や事務局スタッフが適宜チャット上でコメント・解説を投稿する試みを行った結果、オンライン参加者の自由な発言を促す効果が見られた。次回以降も、オンライン参加者へのフォローとして継続する。

「新しい技術と未来への一歩」 メタバースフォーラム

教育分野で活用され始めているメタバースについて、東京（オフライン）、全国（オンライン）でのフォーラムを開催。保護者が新しい技術に触れ、使い方を自身で体験し理解すること、実際に活用する際のマナーやリテラシーを理解し、子どもたちに教えることができることを目的に実施。

（実行委員会の構成）

委員：
齋藤 長行氏 仙台大学 体育学部 メディアデザイン学博士
上沼 紫野氏 虎ノ門南法律事務所 弁護士
舟越 靖氏 株式会社HIKKY 代表取締役
新井 誠司氏 和洋九段女子中学校高等学校

事業の概要

主に保護者を対象としたメタバースに関するフォーラムの開催

- ・対象：東京、全国の保護者
- ・実施地域：東京（オフライン）、全国（オンライン）
- ・実施主体：アディッシュコンソーシアム
- ・対象者：保護者、教職員、小学生、中学生、高校生

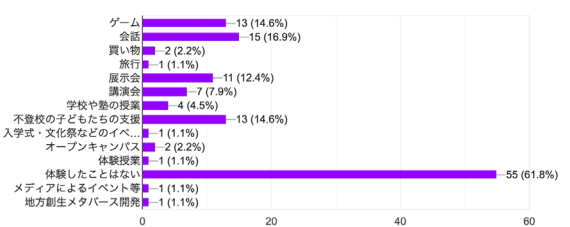
事業のねらい

日進月歩のIT業界からは、新しい技術やサービスがどんどん世に出てきており、昨今では教育業界においてもメタバースを活用した授業や不登校支援、コロナ禍において実施が困難であった文化祭等の行事等が行われている。一方で、大人が自身で新しい技術に触れたり、体験する機会はまだまだ少なく理解が必要とされる領域であると考えられる。今後、子ども達が学校の中のみならず、社会に出る上で関わっていく新技術について、本フォーラムをとおして保護者・教職員が自ら体験、活用する際のマナーやリテラシーを理解し、子どもたちに教えることができ、身近な子どもがメタバース等を利用する際にどのようなスタンスを持つか前もって定めることが出来る状態を目指す。

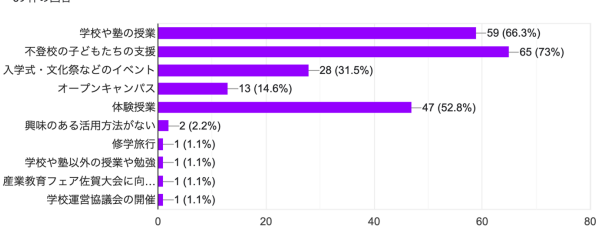
事業の内容

本フォーラムでは、参加者のメタバースに関する関心度合いを測るため、参加申し込みと併せて事前アンケートを行った。参加申込者のうち、メタバース体験について「体験したことはない」が回答した人数は61.8%であった。また、メタバースの興味のある活用方法に関する質問（複数回答可）については、「学校や塾の授業」が66.3%、「不登校の子どもたちの支援」が73%、「体験授業」が52.8%と、学校内での活用について関心を寄せている人が多い様子が見受けられた。なお、フォーラムで取り上げてほしい話題については、「メタバースを利用した際の教育的効果と実践事例」「メタバースを学校教育に取り入れる際に必要な設備面、費用面について」といった回答が寄せられ、活用事例や、導入する上で必要なこと等具体的な話を希望する声が多かった。

メタバース関連で体験したことのあることを教えてください。（複数選択可）
89件の回答



メタバースについて、興味のある活用方法を選択してください。（複数選択可）
89件の回答



本事業の問い合わせ先

アディッシュコンソーシアム
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-21-8 ヒューリック五反田山手通ビル6階 TEL:03-5759-0334
担当：三角（sg-info@adish.co.jp）

POINT 1

新技術をテーマに実施

従来のネットモラルキャラバン隊では、主に扱われてこなかった「メタバース」をテーマにフォーラムを開催。VRイベントの開催、VR開発エンジン提供を行う企業を登壇者に選定する等新技術を多角的な視点から捉えることが可能であった。

POINT 2

メタバース体験

事前にメタバース空間を用意し、参加者が体験できる時間を設けた。出席した保護者や教職員の中には、新技術に触れることに少なからず抵抗感を感じていた参加者もいたが、メタバースを身近なものとして捉えることが出来るようになった。

POINT 3

専門家による質疑応答

参加者からの新技術の扱いにおいて生まれる疑問（法律に関するものや実際の学校に取り入れる方法等）を、各方面における有識者を配置し、質疑応答の時間を設けることで解消することが出来た。

第一部では、参加者が、子どもたちがこれから利用していくメタバースはどのようなものかを理解することを目的に基調講演を行うとともに、メタバースをより身近に感じるためメタバース体験の時間を設けた。第二部では、より参加者の理解を深めるため、メタバースについて、「メタバース活用による可能性」「教育への適用と可能性」「理想的な利用とは」「身に付けるべきマナー・リテラシー」等のテーマをもとに、パネルディスカッションを行った。また、質疑応答の時間では、学校現場でのメタバースの活用についての詳細を有識者から回答する時間を設けた。

■「新しい技術と未来への一歩」メタバースフォーラム

日時：2023年10月28日（土）13:30~17:00

場所：KDX東新宿ビル内 ホールA（3F）

形式：オフライン・オンラインでのハイブリッド形式

・第一部 基調講演

テーマ：「子どもと未来の空間」～メタバースとは～
講師：舟越 靖 様（株式会社HIKKY 代表取締役）

・第二部 パネルディスカッション

テーマ：「メタバースの未来を語る」
～子どもたちと教育の視点からの展望～
ファシリテーター：メディアデザイン学博士 齋藤 長行氏
パネラー：虎ノ門南法律事務所 弁護士 上沼 紫野氏
株式会社HIKKY 代表取締役 舟越 靖氏
和洋九段女子中学校高等学校 新井 誠司氏

・第三部 質疑応答

事前アンケートや当日寄せられた質問に回答



事業のねらいに対する成果

本フォーラムでの参加者アンケートでは、全体の満足度は平均4.3と高い水準であった。基調講演については「非常に参考になった」「参考になった」が100%、パネルディスカッションは「役立つ情報が多く含まれていた」「いくつかの情報が役立つと感じた」が100%、質疑応答においては「多くの新たな知識を得られた」「いくつか新たな知識を得られた」と参加者にとって新たな知識をインプットする機会が創出できたと言える。

また、「メタバースを体験できた」「企業の登壇者からは、これまでの研修会で聞くことの出来なかった話題を伺えた」「専門家や実際に教育に取り入れ始めている先進校の取り組みを聞いた」等の声が集まっており、参加者がメタバースを理解することについて、一定の成果を上げることができた。

課題と今後の展望

本フォーラムの課題は、オフライン7名、オンライン39名と参加人数が他の会と比較して少なかったことが挙げられる。これについては、集客の段階で新たなテーマに対してより興味喚起をするよう設計していく必要があると考えられる。また、参加者のアンケート回答で寄せられた「eスポーツの部活の成功事例」等、引き続き新たなテーマを模索していく必要性がある。

「教育の進化が加速する！

～生成AIの可能性と学校現場での実践を探る！～

事例を交えた講演、生成AI体験、そして「教育現場での活用方法・リテラシー」についてのパネルディスカッションを通じて、参加者が生成AIの知識を身に付け、積極的に活用していけるようなプログラムを提供。

（実行委員会の構成）

委員：
大西 久雄 文教大学教育学部 非常勤講師
村井 宗明 東武トップツアーズ CDO
AIエンジニア
伊藤 将人 宮城県岩沼市立岩沼北中学校
技術科 主幹教諭
宮島 衣瑛 みんなのコード 特任研究員

事業の概要

教育現場に関わるすべての人を対象に、事例を交えた講演、生成AI体験、パネルディスカッションを開催

- ・対象・実施地域
福岡（オフライン）、全国（オンライン）
- ・実施主体
アディッシュコンソーシアム
- ・対象者
児童・生徒、保護者、教職員、教育関係者、
教育業界団体・企業等

事業のねらい

近年、ChatGPTやBardなどの生成AI技術が教育現場に導入され始めており、効果的かつ安全な学習環境への活用が求められている。本シンポジウムでは、前回の生成AIフォーラムでの要望を受けて、学校教育現場での具体的事例紹介を取り入れ、生成AIを積極的に活用している専門家や教員を招いて、講演やパネルディスカッションを実施。参加者は生成AI技術の活用方法に関する理解を深め、今後の学校現場での取り組みについて示唆を得ることをねらいとした。本シンポジウムを経て、参加者が生成AI技術の基本操作から活用方法に関する理解を深め、今後の学校現場での取り組みについて新たなアイデアや発想を取り入れ、生成AIの活用を推進させることを目指す。

事業の内容

本シンポジウムは、講演とシンポジウムの二部構成にし、講演では事例紹介に加え、生成AIの操作方法を学び、体験する時間を設け、受講後すぐに実践につなげていけるような内容を盛り込んだ。シンポジウムでは質疑応答に十分な時間を確保し、事前のアンケートでもらっていた質問や事例紹介で疑問に思った点など、参加者の疑問解消に加え、専門家とのコミュニケーションの機会を設けた。

第一部：講演

「生成AIと教育の未来
～安全で効果的な学習環境の創造を目指そう～」

①生成AI体験

登壇者：村井 宗明（東武トップツアーズ CDO AIエンジニア）
体験内容：子ども用AI「たまゆりくん」、
東京都教育委員会 相談AI「MARIKO」、高校用 小論文AI

②事例紹介

登壇者：大西 久雄（文教大学教育学部 非常勤講師）
テーマ：「生成AIとの向き合い方を考える 小中学校・大学の実践」

内容：
文部科学省GIGAスクール構想
リーディングDXスクール事業推進校の特別授業や教師向け研修の紹介
・埼玉県幸手市立さかえ小学校、幸手中学校 ・埼玉県吉川市立三輪野江小学校
・石川県加賀市橋立中学校



本事業の問い合わせ先

アディッシュコンソーシアム
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-21-8 ヒューリック五反田山手通ビル6階 TEL:03-5759-0334
担当：原（sg-info@adish.co.jp）

POINT 1

生成AI体験

専門家が教育現場で活用してきた生成AI技術を、体験する機会を提供。この体験を通じて、生成AIの基本的な機能や可能性を直接感じ、理解を深め、生徒や教員の立場に立って、活用する際の課題や可能性を具体的に捉えることができた。

POINT 2

事例共有

生成AIを活用する専門家や教員が具体的な事例を共有し、他者のアイデアや取り組みから発想を豊かにすることができた。新たな視点や効果的な戦略を学ぶことで、参加者は自らの教育現場における生成AI活用の可能性を拡げることができた。

POINT 3

専門家による質疑応答

シンポジウムでは、生成AIに関する講演で生じた疑問をその場で解決でき、専門家と意見交換できる有意義な時間を提供できた。参加者の疑問を解消することで、より理解を深め、今後の活動に活かすことのできるような実践的な知識を提供できた。

③事例紹介

登壇者：伊藤 将人（岩沼市立岩沼北中学校）
テーマ：生成AIパイロット校としての取り組み～生成AI活用実践事例～
宮城県岩沼市立岩沼北中学校
内容：生成AIパイロット校である岩沼市立岩沼北中学校での実践を紹介
・実践の前に取り組んだこと、準備事項
・実践内容
・生徒の感想や今後の課題を紹介

第二部：パネルディスカッション

「次世代の教室を体験しよう
～学校における生成AIの実践事例とは～」

参加者からの事前アンケート結果を元に、パネルディスカッションを実施。ハルシネーションをめぐるファクトチェックの問題や生成AIを学びに活かすための授業デザインなど、より実践に近い内容を議論することができた。また、第一部の講演内容についても考察し、現場での具体的な対応や振り返りも行うことで、さらに理解を深め、各分野の専門家による知見に触れ、意見交換することができた。



事業のねらいに対する成果

本シンポジウムの参加人数は256名、そのうち教職員からの申し込みは187名であった。生成AIへの教職員からの興味、関心の高さが伺える結果となった。参加者アンケートでは、全体の満足度は平均4.3と高い水準であった。講演の内容については、「非常に参考になった」「参考になった」が96.9%、パネルディスカッションの内容については、「役立つ情報が多く含まれていた」「いくつかの情報が役立つと感じた」が96.9%であった。特に価値があったと感じた点では、「授業における生成AIの活用の実践例を知り、イメージができた」「パネルディスカッションを聞きながら、まずは自身が、生成AIを使って何をしたいのかを明らかにすべきだと気付くことができた」「まずは、やってみようと思わせていただけたことが価値深い。刺激になった。」「今回の講話は、今まで受けてきたセミナーとは違った観点からの話が多く、とても参考になった」など生成AIの活用に向け、前向きな感想が寄せられ、より実践的な内容で、受講者の生成AIへの理解と活用への意欲を掻き立てることができ、一定の成果を上げることができた。

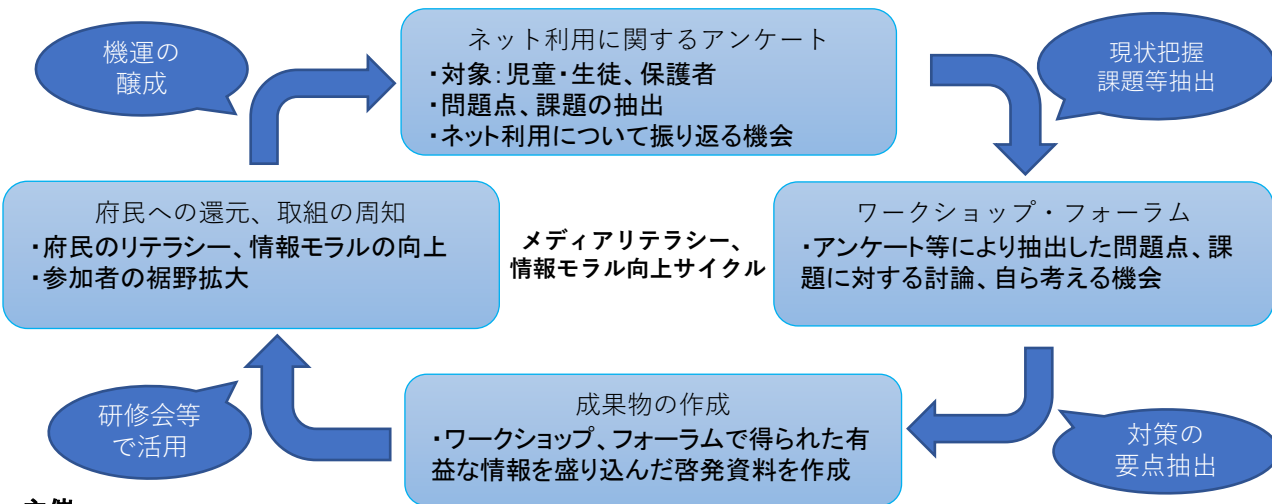
課題と今後の展望

前回のフォーラムでの生成AIへの関心の高さをを受けて、本シンポジウムでは引き続き生成AIに焦点を当てた内容を提供した。両イベントを通じて、参加者からの生成AIへの興味関心の高さを確認することができた。参加者から寄せられた意見では「日々進化する生成AIを使用する中で、授業での課題を共有してほしい」や「問題別解決方法の参考になるサイト、資料などがあれば知りたい」など生成AIについて最新で正確な情報が求められていることも確認できた。イベントだけでなく、定期的に情報の更新や学びの機会、利用者がすぐに情報を得られるようなサイトや資料の提供が必要であると考え。今後は、一般市民や企業、教育機関等に対して、生成AIに関する啓発活動を強化し、専門家による生成AI技術の研修プログラムを定期的に提供し、さらには基礎から応用まで幅広い内容をカバーし、参加者が実務に活かせるスキル獲得を支援する場を提供していく必要があると考える。

令和5年度「青少年いいねット京(みやこ)フォーラム」(京都府)

府内の中学生、高校生が、自分達で適切なインターネットの利用を考え意見交換することによるメディアリテラシーと情報モラルの向上を目的として、ワークショップと公開討論会を開催しました。

事業の概要



主催

オール京都で子どもを守るインターネット利用対策協議会

- 総務省近畿総合通信局 ●法務省地方務局 ●京都府 ●京都府教育委員会 ●京都府警察 ●京都市 ●京都市教育委員会 ●京都市市長会 ●京都府町村会 ●京都市町村教育委員会連合会 ●京都府私立中学高等学校連合会 ●京都府PTA協議会 ●京都市PTA連絡協議会 ●京都府立高等学校PTA連合会 ●京都府私立中学高等学校保護者会連合会 ●公益社団法人京都府青少年育成協会 ●公益財団法人京都市ユースサービス協会 ●京都府少年補導連絡協議会 ●京都市少年補導委員会 ●公益社団法人京都府少年補導協会 ●公益社団法人京都府防犯協会連合会 ●全国大学生協連京滋・奈良ブロック ●一般社団法人電気通信事業者協会 ●一般社団法人安心ネットづくり促進協議会 ●株式会社ドコモCS関西 ●KDDI株式会社 ●ソフトバンク株式会社 ●任天堂株式会社 ●デジタルアーツ株式会社 ●株式会社ディー・エヌ・エー ●ポールトゥウィン株式会社 ●京都弁護士会

事業のねらい

昨今、情報通信機器の普及に伴い、インターネット利用者の低年齢化が進む中、インターネット上で流通する情報には、偽・誤情報や誹謗中傷も含まれるなどの問題が顕在化しており、これからのデジタル社会において、青少年はインターネットを適切に活用するためのリテラシーを身につけることが必要である。本事業では、府内の青少年やその保護者に対するインターネット利用に関するアンケートの実施やフォーラムへの参加などの一連の取組を通じて、自分達で適切なインターネットの利用を考える機会を設け、アンケート結果や成果物を活用した啓発によって、青少年及び保護者のメディアリテラシーや情報モラルの向上などの意識の変化を目標としています。

事業の内容

1 インターネット利用状況に関するアンケートの実施

5月から6月にかけて、府内の小学生から高校生の児童、生徒及びその保護者の皆さんにインターネット利用に関するアンケート調査を行いました。

(回答数:小学生2,586人、中学生5,660人、高校生3,202人、保護者6,207人、合計17,655人:前年対比+7,884人)
 主な調査項目は、携帯電話の所持率、ネット接続時間、課金経験やネットで知り合った人と会った経験の有無などで、ネット接続時間4時間未満の人とそれ以上の人との差異について調査したところ、4時間以上と答えた人は、生活面や学習面において乱れが出たり、ネットで課金したり、ネットを通じて知り合った人と会ったりした割合が高いという結果でした。

また、児童、生徒とその保護者の回答を比べたところ、保護者が思っているよりも、子どもたちは、課金をしていたり、インターネットで知り合った人と実際に会っているなど両者の認識には差があることがわかりました。

2 事前学習会

フォーラムに向けて、府内11校の中学生・高校生が7月に京都府立京都学歴彩館に集まり、インターネット利用に関するアンケートの結果を題材として、インターネットの適切な利用などについて考えるワークショップを行いました。ワークショップ後、参加者は学校ごとに保護者、先生、自治体、自分達への提言を考え、今年で7回目となるフォーラムの発表準備に取り組みました。



事前学習会の様子

3 令和5年度 青少年いいねット京(みやこ)フォーラム

開催日時・場所

日時: 令和5年8月21日(月)13時30分～16時30分

場所: 京都市北文化会館ホール

参加校

京都市立岡崎中学校、京都市立春日丘中学校、京都市立西院中学校、京都市立西賀茂中学校、京都市立栗陵中学校宇、京田辺市立大住中学校、京田辺市立立田中学校、京田辺市立培良中学校、京都府立鴨沂高等学校、京都府立朱雀高等学校、京都府立京都すばる高等学校

コーディネーター

兵庫県立大学環境人間学部 教授 竹内和雄氏

内容

参加校の代表4校が保護者、先生、自治体、自分達に向けた意見を発表し、代表3校が制作したインターネット利用に関する啓発動画を発表した後、参加生徒と保護者、教諭、警察の方らとのパネルディスカッションを行いました。



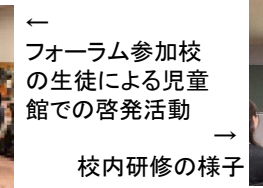
フォーラムの様子

4 啓発リーフレットの作成及び啓発活動

- アンケート結果やフォーラムなどの一連の取組を通じて得られた有益な情報を盛り込んだ小学生向けの啓発リーフレットをフォーラム参加校の協力を得て作成、令和6年2月に府内の小学5、6年生(約4万人)に配付して、インターネットトラブルの未然防止について啓発を行いました。
- 高校生による小学生を対象としたインターネットトラブル防止のための啓発人形劇を企画し、フォーラム参加校の協力を得て、京都市内の児童館において啓発活動を行いました。



啓発リーフレット



フォーラム参加校の生徒による児童館での啓発活動

校内研修の様子

POINT 1

アンケートによる実態調査

小学生から高校生とその保護者を対象に青少年のインターネット利用状況に関するアンケート調査を行い、それらを比較することで、様々は課題が見えてきました。



フォーラム
開催結果
のサイトへ



アンケート
調査結果
のサイトへ



フォーラムで発表
した啓発動画
のサイトへ



リーフレットを
紹介したサイトへ

POINT 2

青少年が自ら考える機会に

アンケートから明らかになった注意すべきポイントについて、皆で意見を交わすことで、インターネットやスマートフォン
の適切な利用を自ら考える機会となりました。

POINT 3

リテラシー向上の契機

アンケートやフォーラムから得られた情報を盛り込んだ啓発資料を作成し、学校や関係機関等にフィードバックして、校内研修や啓発活動などで活用してもらい、リテラシー向上の契機となりました。

事業のねらいに対する成果

アンケート調査では、回答数が前年の約8割増加し、協力校(88校:前年度対比+13校)も増え、学校や保護者等の子どもたちのネット利用に対する関心の高まりや取組の周知について実感が得られました。フォーラムでは、様々な意見が交わされ、ネットトラブルやネット依存を解消するには、小さな意見交換の積み重ねが一番大切だと気付かされたなどの感想があり、インターネットやスマートフォンの適切な利用を自ら考える機会となりました。また、アンケートやフォーラムで得られた有益な情報については、研修会や啓発資料作成などに活用できると反響もよく、一連の取組を通じて、各学校でインターネットの使い方について振り返る機会となるなど意識の変化を感じました。小学生向けの啓発活動では、主に小学2年生を対象に人形劇での啓発を行ったところ、児童たちは、「実際のお金を使った課金はダメだ」などと答える一方「分からないことがあったらネットで調べたら良い」などと答え、正しい情報かどうかを判断する力が必要だと考え、啓発を行いました。

課題と今後の展望

アンケートへの協力は増えていますが、京都府京都市以南(山城地域)や北部地域(中丹、丹後地域)からのフォーラムへの参加が低調であり、また、参加校に偏りがあるため、関係機関と更に連携を強化し、学校や教育関係者、保護者への周知を図り、府内全域に取組を浸透させることが課題と考えています。

今後も本事業を継続させ、関係機関と連携して広報することで、参加者の裾野を広げつつ、府民のメディアリテラシーや情報モラル向上のための取組を展開していきます。

本事業の間合わせ先

オール京都で子どもを守るインターネット利用対策協議会事務局(京都府健康福祉部家庭支援課)
 電話:075-414-4305 E-mail:kateishien@pref.kyoto.lg.jp

生成AIと未来の学校教育

～生成AIの可能性と守るべきリテラシーについて～

教育分野で活用され始めているメタバースについて、兵庫（オフライン）、全国（オンライン）でのフォーラムを開催。保護者が新しい技術に触れ、使い方を自身で体験し理解すること、実際に活用する際のマナーやリテラシーを理解し、子どもたちに教えることができることを目的に実施。

（実行委員会の構成）

| | |
|--------|-------------------|
| 委員 | |
| 宮島 衣瑛氏 | みんなのコード 特任研究員 |
| 中村 亮太氏 | 東京学芸大学附属 竹早小学校 教諭 |
| 大西 久雄氏 | 文教大学教育学部 非常勤講師 |
| 米田 謙三氏 | 早稲田摂陵高 学校 教諭 |

事業の概要

主に教職員を対象とした生成AIに関するフォーラムの開催

- ・実施地域：兵庫（オフライン）
全国（オンライン）
- ・実施主体：アディッシュコンソーシアム
- ・対象者：小学生、中学生、高校生、保護者、教職員など

事業のねらい

近年、AI技術の進化と共にChatGPTやBardなどの「生成AI」が注目されており、音楽、画像、テキストなどのコンテンツを自動生成できる等、多くの可能性を秘めている。しかし、その活用方法やリスクについて十分に理解されていないのが現状であり、子どもたちが成長する中でこの技術とどのように向き合っていくべきかを考えることは非常に重要である。今後、特に教育の場で関わっていく機会が増えると予想される新技術について、本フォーラムを通して教職員や保護者が活用する際のマナーやリテラシーを理解し、子どもたちに教えることができる状態を目指す。同時に、学校教育の場でどのように生成AIを活用することができるのかについて、各分野の専門家による知見に触れ、より理解を深めてもらう。

事業の内容

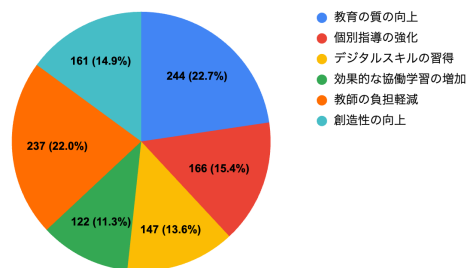
本フォーラムでは、参加者の生成AIの関心度合いを測るため、参加申し込みと併せて事前アンケートを行った。参加申込者のうち、生成AIへの理解度について「興味はあるが、使ったことはない」と回答した人数は44.8%、「使ったことはあるが、いまいち活用できていない」と回答した人数は30.8%であった。

また、生成AIを教育に活用する上で期待すること（複数選択可）については、1つの項目に偏ることなく、6つの項目に満遍なく票が入った。（グラフA参照）

一方で、生成AIを教育に活用する上で不安なこと（複数選択可）については、「生成AIへの依存」が33.9%、「個人情報等の漏洩」が24.0%と、精神面・環境面において安心して生成AIを利用することができるかについて関心を寄せている人が多い様子が見受けられた。

なお、フォーラムで取り上げてほしい話題については、「生成AIを活用する上での法律上の問題や権利関係について」「生成AI活用による教育的効果と考えられるデメリットと対策」といった回答が寄せられ、生成AIを教育現場に導入する上で必要となってくるポイントの具体的な話を希望する声が多かった。

グラフA：生成AIを教育に活用する上で期待すること



本事業の問い合わせ先

アディッシュコンソーシアム
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-21-8 ヒューリック五反田山手通ビル6階 TEL:03-5759-0334
担当：柳田 (sg-info@adish.co.jp)

POINT 1

「生成AI」という新たなテーマで実施

従来のネット地域対策モデル事業では扱われてこなかった「生成AI」をテーマにフォーラムを開催し、学校教育と社会教育の両面から先進的な取り組みを行っている専門家を登壇者に選定し多角的な視点を得られた。

POINT 2

守るべきマナーやリテラシーへの理解

生成AIは、利用次第で可能性も危険性も秘めているツールである。子どもたちに教える立場の教職員や保護者がまずは適切に利用できるよう専門家からの意見を得ることで、より身近なものとして捉えることができる。

POINT 3

実際の教育現場での活用事例

事前アンケートでも要望の多かった活用事例について、教育現場でどのように生成AIが使われているのかを実際に児童生徒に生成AIを使った授業を行っている専門家からリアルな話を伺うことができた。

第一部では、参加者が生成AIの環境を知り、対策を考えるきっかけにさせていただけるよう、「生成AIの基本とリテラシーについて」というテーマで基調講演を行った。第二部では、参加者からの事前アンケート結果を元に、「AIの理想的な利用とは」「身に付けるべきマナー・リテラシーとは」「子どもたちにとって生成AIがどのような可能性に繋がるのか」等のテーマでパネルディスカッションを行い、各分野の専門家による知見に触れ、さらに生成AIの理解を深めた。

■ 生成AIと未来の学校教育 ～生成AIの可能性と守るべきリテラシーについて～

日時：2023年11月26日（土）13:30~16:00

場所：三宮コンベンションセンター503号室

形式：オフライン・オンラインでのハイブリッド形式

第一部 基調講演

テーマ：生成AIの基本とリテラシーについて

講師：宮島 衣瑛氏（みんなのコード 特任研究員）

第二部 パネルディスカッション

テーマ：生成AIの教育現場での活用事例

ファシリテーター：早稲田摂陵高等学校 教諭 米田 謙三氏

パネラー：みんなのコード 特任研究員 宮島 衣瑛氏

文教大学教育学部 非常勤講師 中村 亮太氏

文教大学教育学部 非常勤講師 大西 久雄氏



事業のねらいに対する成果

現地参加30名、オンライン参加356名と最多の申込数であり、最終参加人数は現地参加19名、オンライン参加145名と生成AIに対しての興味関心の高さが伺える。本フォーラムでの参加者アンケートでは、全体の満足度は平均4.5と高い水準であった。基調講演については「非常に参考になった」「参考になった」が100%、パネルディスカッションは「役立つ情報が多く含まれていた」「いくつかの情報が役立つと感じた」が91.8%、質疑応答においては「多くの新たな知識を得られた」「いくつか新たな知識を得られた」が72.6%と、参加者にとって新たな知識をインプットする機会が創出できたと言える。

また、「初めてchatGPTを体験し、教育現場での活用について考えるきっかけとなりました。」「生成AIを活用する人間が、きちんと考えをもつことが重要と気づかせられた。」「生成AIをどのように教育に取り入れていけばいいのか、道筋が見えました。」等の声が集まっており、参加者が生成AIを理解することについて、一定の成果を上げることができた。

課題と今後の展望

本フォーラムの課題は、パネルディスカッションの際に、各専門家からの事例紹介の時間が長くなってしまったため、次回以降は、複数の基調講演を設置し、あらかじめ事例を発表することで、本来のパネルディスカッションとしての時間を確保していく。

今後の展望については、上記の申込人数からも分かる通り、生成AIに対して興味関心の高さが伺えたため、同テーマでシンポジウム開催を検討する。また、事後アンケートでは、「学校教育現場での事例紹介を聞きたい」という声も多数あったため、その内容を取り入れ、次回に繋げる。

青少年のデジタル・ウェルビーイング

～事例から学ぶ保護者と教職員のための実践ネットリテラシー～

身近で実際に起きたインターネット利用に関する青少年のトラブル事例から実態を把握し、青少年のオンライン安全とネットリテラシーについての理解を深め、デジタルウェルビーイングのあり方を考える。また、学びから実際に活用できる知識やスキルを獲得するとともに、今からできる対応策を実践に繋げる。

(実行委員会の構成)

委員

米田 謙三氏 早稲田摂陵高等学校 教諭
齋藤 長行氏 仙台大学 教授
國見 充展氏 茨城キリスト大学 准教授
森 雅人氏 一般社団法人日本刑事技術協会
上席コンサルタント

事業の概要

有識者によるリアルな事例を交えた講演と「青少年のデジタルウェルビーイング実現のためにできること」についてパネルディスカッションを通じて、参加者が積極的に議論に参加できるようなプログラムを提供。

- ・日時：2024年2月17日（土）13:30～16:15
- ・実施地域：茨城（オフライン）
全国（オンライン）
- ・実施主体：アディッシュコンソーシアム
- ・対象者：児童生徒、保護者、教職員、
関係団体、企業など

事業のねらい

現代社会において、インターネットとデジタルデバイスは私たちの日常生活に欠かせない存在となった。特に青少年にとっては、学習、コミュニケーション、エンターテインメントの重要な源泉である一方で、様々なネットトラブルのリスクも伴っていた。このため、保護者や教育関係者は、青少年がオンライン空間を安全かつ健全に利用するための支援が求められてる。本フォーラムでは、支援をするために必要な青少年のインターネット利用における現状と心理を理解し、テクノロジーと日常生活のバランスを取り、デジタルに関わる生活の中で健康やワークライフバランスを意識すること（デジタルウェルビーイング）の重要性を考慮し企画された。講演やパネルディスカッションを通して、参加者がデジタル環境で直面する可能性のあるトラブルやリスクについて理解を深め、必要な環境の整備や対策について実践形式で対策できることを目指す。

事業の内容

本フォーラムでは、青少年のインターネット利用の現状と心理、テクノロジーと生活のバランスを取り、デジタルに関わる生活の中で健康やワークライフバランスを気にかけること（デジタルウェルビーイング）を実現するために、知っておくべきトラブルや必要な環境について実践を学んだ。

第一部では、「基調講演」と題して、3名の専門家が登壇。最新のネットトラブル事例に焦点を当てた講演を行った。各講演を通じて、現在のインターネット環境における実際のトラブル事例を詳しく紹介し、その実態を深く掘り内容を提供した。

第二部は、「青少年のデジタルウェルビーイング実現のためにできること」と題し、第一部で取り上げたトラブル事例を踏まえて、デジタル機器との適切な関わり方を深掘りし、デジタルウェルビーイングを考えた。このセッションでは、青少年がインターネットを健全に活用できるように導くための具体的な方法や対策について議論した。参加者は、質疑応答を通じて、より深い洞察と対処方法を学んだ。



本事業の問い合わせ先

アディッシュコンソーシアム
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-21-8 ヒューリック五反田山手通ビル6階 TEL:03-5759-0334
担当：仲間 (sg-info@adish.co.jp)

POINT 1

多様な分野の専門家による講演

青少年のデジタルウェルビーイングに関する深い洞察と具体的な対策を提供。多様な分野の専門知識を持つ専門家を招くことで、問題解決に幅広い視点を取り入れた。

POINT 2

具体的な事例

実際に起こったネットトラブルの事例を基に、その対策と予防方法を学習した。このアプローチにより、抽象的な話ではなく、具体的な事案に基づき、現状を深く理解することができた。

POINT 3

実践対策

参加者が学んだ知識を実生活に応用するための具体的な手法を提示。講演やディスカッションを通じて得た情報を、実際のインターネット内の行動リスクや環境整備の重要性を学ぶことで青少年へのサポートのあり方を見直せた。

第一部 基調講演

- 子どものデジタル・ウェルビーイングに向けて
齋藤 長行氏（仙台大学）
- SNS利用から見る青少年の心理
國見 充展氏（茨城キリスト教大学）
- ネットトラブルの実態
森 雅人氏（日本刑事技術協会）

第二部 パネルディスカッション

テーマ：
青少年のデジタルウェルビーイング実現のためにできること

ファシリテーター：
早稲田摂陵高等学校 教諭 米田 謙三氏

パネラー：
仙台大学 教授 齋藤 長行氏
茨城キリスト教大学 准教授 國見 充展氏
日本刑事技術協会 上席コンサルタント 森 雅人氏

質疑応答・総括

本フォーラムでは、参加申し込みと併せて事前アンケートを行った。アンケートでは、「インターネットトラブルを見かけてことがある」が85%、トラブル内容ではフィッシングメールが最も多く、次いで「言葉の鳥違いでトラブル」、「悪口や嫌がらせ」、「チェーンメール」となっている。

事業のねらいに対する成果

本フォーラムを通じて、保護者や教職員は、青少年がオンライン空間で直面する可能性のある問題についての洞察を深めることができた。また、事後アンケートでも「デジタルウェルビーイングの視点を理解できた」「生徒や保護者に伝えるべきことがまとまって良かった。」「パネリストの話はとてもリアルで響いた」などの声があり、これらの問題に対処するための知識とスキルを身に付け、理解を深めることができていた。満足度も9割以上と高かった。

専門知識の普及と意識向上: 専門家の講演とパネルディスカッションにより、教職員や保護者のデジタルウェルビーイング及びリスクへの理解と意識が高まった。

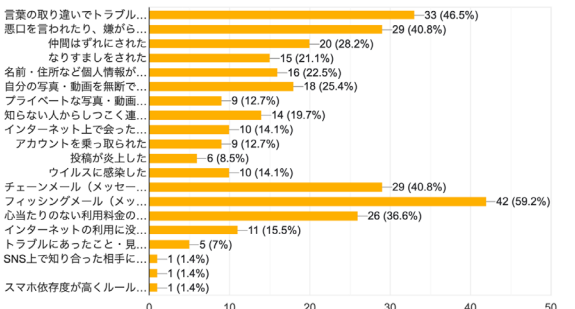
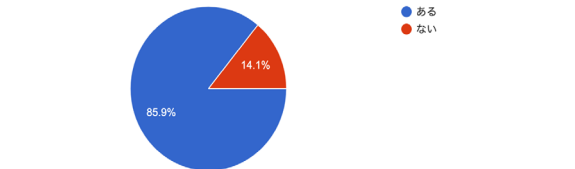
実践的な学びの提供: 具体的なネットトラブル事例を通じて、実践可能な知識やスキルの習得が促進された。
問題への対処能力の向上: 提案された対策やガイドラインは、参加者のデジタル環境における問題対処能力を向上させた。

これらはフォーラムの主目的である青少年のデジタルウェルビーイング実現と教育関係者のスキル向上に大きく貢献した。

課題と今後の展望

ネットリテラシーをデジタルウェルビーイングという視点で対応できたことはよかったが、一方で事後アンケートでトラブル事例だけでなく、トラブルの内容については、詐欺被害、誹謗中傷の法的範囲、いじめによる不登校への対策などの要望もみられた。また、参加型による討論を要望する声もあり、より具体的に、より多くの内容について、ワークショップを求める声もあった。これらを踏まえて、事前アンケートで課題が掘めるような情報取得の設問の見直しや、参加型の企画についても今後考える必要がある。

インターネットを利用して、トラブルにあったこと・見かけたことはありますか。
71件の回答



オフラインあそび塾（兵庫県）

インターネット利用の低年齢化に対応するため、低年齢層の子どもとその保護者を対象に、あそびや体験活動を通じて、スマートフォン・ゲームとの上手なつきあい方を身につけてもらい、あわせて保護者にはネット利用についてのルールづくり等を促す機会とする。

- （青少年のネットトラブル防止大作戦推進会議の構成員）
- ・兵庫県立大学環境人間学部 竹内 和雄 教授【座長】
 - ・神戸親和大学教育学部 金山 健一 教授
 - ・神戸大学大学院医学研究科 曾良 一郎 特命教授
 - ・幸地クリニック
 - ・兵庫県立神出学園
 - ・（一財）野外活動協会
 - ・淡路市ICTクラブ協議会
 - ・あわじ次世代テック推進会
 - ・兵庫県PTA協議会
 - ・阪神南こころ豊かな人づくり委員会
 - ・東播磨青少年本部
 - ・（株）サンテレビジョン
 - ・日本放送協会神戸放送局
 - ・（株）神戸新聞社
 - ・（株）朝日新聞社神戸総局
 - ・（株）ドコモCS関西神戸支店
 - ・（一社）いえしま自然体験協会
 - ・兵庫県教育委員会事務局教育企画課
 - ・神戸市教育委員会事務局学校教育部学校教育課
 - ・兵庫県警察本部生活安全部少年課
 - ・兵庫県警察サイバーセキュリティ・捜査高度化センター サイバー企画課
 - ・兵庫県県民生活部男女青少年課
 - ・（公財）兵庫県青少年本部【事務局】

事業の概要

〈家族での体験活動を通じてネット利用を考えるイベントの実施〉
未就学児、小学生（主に低学年）とその保護者を対象に、野外活動や工作などの体験活動を通じて、子どもたち自身に「ネットやゲームよりも面白いこと」を見つけさせる。
また、保護者にも、子どもにネットを使わせる上での注意点、家庭でのネット利用のルールづくりや家族でのコミュニケーションの大切さ等について啓発し、保護者をはじめとする大人も、今まで以上に安全安心なインターネット利用方策や効果的なルール等について一緒に考える機会とする。

- ・対象：小学生以下の子どもとその保護者
- ・実施地域：県内5か所
- ・応募者：160家族 481名
- ・参加者：75家族 226名
- ・実施主体：（公財）兵庫県青少年本部 兵庫県
- ・実施協力：（NPO法人）生涯学習サポート兵庫
（NPO法人）兵庫県レクリエーション協会

事業のねらい

- 1 青少年の過度なネット利用による健康面への影響や犯罪被害を未然に防止するため、未就学児、小学生（主に低学年）とその保護者にターゲットを絞り、あそびや工作等の体験活動を通じてスマホ・ゲームとの上手なつきあい方を身につけさせる。
- 2 県及び青少年本部がこれまで取り組んできた「スマホサミット」や「オフラインキャンプ」の成果、「子どものスマホ利用に関するガイドライン」、「ワークシート」等を活用し、ネット利用についてのルールづくり、コミュニケーションの大切さ等を保護者に啓発し、青少年の健全育成を推進する。

事業の内容

第1回「家族でわくわく！ダンボール迷路をつくろう！あそぼう！」

日時：令和5年10月15日（日）14：00～16：00
会場：兵庫県立但馬文教府（豊岡市妙楽寺41-1）
対象：3歳から小学校6年生までの子どもと保護者
内容：家族単位による巨大ダンボール迷路づくり
保護者に対しては、イベントのふりかえり及びネット利用に関する啓発を実施
参加者：13家族38名



第1回イベントの様子

第2回「ファミリー逃走隊～こどものネットトラブルを回避せよ～」

日時：令和5年11月11日（土）9：30～12：30
会場：兵庫県立明石公園（明石市明石公園1-27）
対象：小学校3年生以下の子どもと保護者
内容：ネット利用に関するクイズを取り入れた逃走隊
イベントのふりかえりとして家庭でのルールづくりの策定及び啓発を実施
参加者：18家族52名



第2回イベントの様子

本事業の問い合わせ先

公益財団法人兵庫県青少年本部企画部（県民運動担当）
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1 兵庫県県民生活部男女青少年課内
Tel：078-362-3142 E-mail：danjoseishounen@pref.hyogo.lg.jp Web：http://www.seishonen.or.jp/

POINT 1

■親子であそび、共に考える
青少年のネット利用に関する問題は、子どもだけの問題ではなく、保護者が一緒になって考える必要がある。また、インターネット利用の低年齢化が進んでいるため、低年齢層の子どもと保護者が協力できる「オフラインあそび」を通じて、ネット利用を考えることができるイベントを実施した。

POINT 2

■活動後のふりかえりと啓発
イベントの終盤には、子どもと保護者が同じ目線で活動したことを踏まえた家族単位でのふりかえりや、兵庫県が推進している「家庭でのインターネットルールづくり」や「子どものスマホガイドライン」に関する啓発を実施し、子どもと保護者が一緒に考えることを実践できた。

POINT 3

■参加者からのアンケート
イベント終了後に、参加者に対してアンケート調査を実施した。アンケート調査からは、イベントの感想だけではなく、イベント後に家庭で策定したネット利用のルールの内容や、子どものインターネット利用の低年齢化が進んでいることを、確認することができた。

第3回「オフライン OUTDOOR DAY～手作りカメラで身近な自然を探しに行こう～」

日時：令和5年11月25日（土）10：00～12：00
会場：兵庫県立こどもの館（姫路市太市中915-49）
対象：3歳から小学校入学前の子どもと保護者
内容：親子での手作りクラフト体験後、自然の中での散歩、しゃぼん玉遊び
イベントのふりかえりで、ネット利用に関する啓発を実施
参加者：16家族51名



第3回イベントの様子

第4回「家族でわくわく！ダンボール迷路をつくろう！あそぼう！」

日時：令和5年12月23日（土）10：00～12：00
会場：広野市民センター（三田市上井沢28-1）
対象：3歳から小学校6年生までの子どもと保護者
内容：家族単位による巨大ダンボール迷路づくり
保護者に対しては、イベントのふりかえり及びネット利用に関する啓発を実施
参加者：9家族31名



第4回イベントの様子

第5回「家族でわくわく！ダンボール迷路をつくろう！あそぼう！」

日時：令和6年1月20日（土）10：00～12：00
会場：兵庫県立淡路文化会館（淡路市多賀600）
対象：3歳から小学校6年生までの子どもと保護者
内容：家族単位による巨大ダンボール迷路づくり
保護者に対しては、イベントのふりかえり及びネット利用に関する啓発を実施
参加者：19家族54名



第5回イベントの様子

ふりかえり・啓発の様子



事業のねらいに対する成果

各回のイベント後に実施したアンケートでは、「非日常を感じることができた」、「スマホと距離を置いたことで、あそびに没頭できた」などの回答が多かったことから、ネットから離れ、親子であそびや工作等の体験活動をする楽しさを感じるきっかけを提供できた。
また、保護者向けの啓発に関しては、イベント中に、「ワークシート」の活用方法や、インターネット利用のルールづくりの啓発を実施し、「スマホ等の利用で分からないことがあれば親子で相談する」、「ネット・ゲームは一日〇時間まで」といったネット利用のルールの策定につなげることができた。

課題と今後の展望

インターネット利用の低年齢化について、イベント終了後に「お子様は何歳ごろからネットを使い始めましたか」というアンケートを実施したところ、平均4.1歳という結果であったことから、今後も引き続き低年齢層に対するインターネット利用対策を実施する必要がある。
今回のイベントの各市町への展開や、保護者向けの啓発チラシ・啓発動画の作成など、引き続き、低年齢の子どもがいる家族層に対して、安心安全なインターネット利用について啓発する機会を提供する取組が求められる。

ぎふあおぞらキャンプ2023

ネットの利用を見直したい県内の小・中学生を対象に、一定期間ネットから離れ、仲間とともに、体験活動や認知行動療法等を通して、自分の日常生活を見直すとともに、コミュニケーション能力や社会性の向上、インターネットの利用を自分でコントロールする力を身に付け、ネット依存を回避するきっかけとなるキャンプを開催する。

- (事業検討委員会)
- ・岐阜女子大学教授 横山 隆光(委員長)
 - ・医療法人杏野会各務原病院医師 天野 雄平
 - ・ネット安全・安心ぎふコンソーシアム会長
 - ・岐阜県小中学校長会長
 - ・岐阜県PTA連合会副会長
 - ・岐阜県教育委員会学校安全課
 - ・岐阜県健康福祉部保健医療課
 - ・岐阜県精神保健福祉センター
 - ・岐阜県環境生活部私学振興・青少年課(事務局)

事業の概要

- 1 事業検討委員会の実施(2回)
- 2 大学生メンター事前研修会の実施
- 3 実務担当者会議の実施(1回)
- 4 ぎふあおぞらキャンプの実施
プレキャンプ・メインキャンプ・フォローアップキャンプ
- 5 参加対象: ネットとのつきあい方を見直したいと望む
児童・生徒(小学校高学年～中学生)
- 6 参加者: 4名
- 7 会場: 岐阜市少年自然の家

事業のねらい

- ・県教育委員会の調査から、児童・生徒のネットやゲームの利用時間が増加傾向にある。
- ・宿泊を伴う体験活動や認知行動療法等を通して、自分の日常生活を見直すとともに、コミュニケーション能力や社会性の向上、ネットの利用を自分でコントロールする力を身に付ける。
- ・ネット依存の専門家による講義などを家族向けに実施し、保護者にネット依存や子どもへの対応の仕方などについて理解を深める機会を提供し、参加者たちの生活の基盤である家庭環境を整えることができる。

事業の内容

【プレキャンプ】 令和5年9月16日(土)、17日(日) 1泊2日

- ①キャンプ説明会
キャンプのねらいや内容等について理解し、目的をもって参加して頂けるよう説明会を実施した。
- ②野外活動
2グループに分かれ、オリエンテーリングを行った。多くの自然に触れることのよさとともに、仲間と目的を一つにして取り組むことのよさを味わった。
- ③創作活動
オリエンテーリングで採集した葉を材料に、しおりづくりを行った。
- ③講座「引き金と行動」
どんな時にインターネットをしたくなるのか(引き金)、日々の生活を振り返り、インターネットがしたくてたまらなくなった時の対処法(行動)について考えた。
- ④保護者講話
医療関係者から保護者に対し、ネット依存の症状や、ネットやゲームの影響について話し、理解を深めた。

【メインキャンプ】 令和5年10月21日(土)、22日(日) 1泊2日

- ①野外炊事
カレーライスの調理を行った。かまどでの火起こしは、参加者自身で火がうまくつく方法を考えた。片付け、掃除まで協力して粘り強く活動した。

本事業の問い合わせ先

岐阜県環境生活部私学振興・青少年課
〒500-8570 岐阜県岐阜市藪田南2-1-1
TEL:058-272-8238 FAX:058-278-2612 E-mail:c11151@pref.gifu.lg.jp

POINT1

■リアルな体験

野外体験学習や創作活動で、体を動かし、人と関わるリアルな体験を通して、ネット以外で夢中になれる自分を発見する。

POINT2

■自分を見つめる

認知行動療法や大学生メンターとの振り返りを通して、自分の日常生活やネットのつきあい方を自覚し、見直しのきっかけをつくる。

POINT3

■家族と共に

ネット依存傾向にある子の支援には、家族の支えが不可欠。親子一緒になって改善に向けて取り組むきっかけづくりをする。

②グループ活動

室内でインディアカを行った。参加者は初めてインディアカを行ったが、次第に慣れ、互いに声を掛け合いながら、体を動かすことを楽しんだ。

③野外活動

地図を見ながらポイントとなる印を探し周った。虫の鳴き声や、星空を見上げながら夜の自然に浸ることができた。

④医療関係者による、ネット依存に関する講義を行い、睡眠時間の確保、ネット利用のルールづくり等が大切であることを学んだ。

⑤講座

ネットやゲームを行うことで、どんな良いこと、悪いことがあるか、ネットやゲームを行わないことで、どんな良いこと、悪いことがあるかを話し合い、自己を見つめることができた。

【フォローアップキャンプ】 令和5年11月11日(土)、12日(日) 1泊2日

・内容

①創作活動

竹箸づくりを行った。竹をそれぞれ自由に削り、オリジナル箸を作った。作った箸は、その後の昼食で使用した。

②講座「イライラと上手につき合おう」

ネットやゲームでイライラした時の行動や、気持ちを思いだし、そのときの対処方法を考えることで、上手な付き合い方を学んだ。

③保護者講話

子どもへ思いを伝えるとき、どのような言葉のかけ方をするとより効果的なのかを、保護者同士の交流を通して学んだ。

④まとめ・振り返り

ぎふあおぞらキャンプ2023の活動で心に残ったことやキャンプ参加前後の自分のネットとの関わり方の変化について考えた。最後に、再度ネットとのつきあい方についての目標を明確にした。

事業のねらいに対する成果

○キャンプ前後およびキャンプ終了1か月後に行ったスクリーニングテストの結果から、ネット依存リスクの数値は全ての参加者が減少した。なお、全キャンプに参加した3名のうち2名がキャンプ前の「中リスク」からキャンプ終了1か月後「リスクなし」に改善した。

○ネットの使用時間については、3名中2名が減少した。もう1名は、使用時間は減少しなかったが、使用時間の約束を守り、学習時間の増加、学校への登校が増えた。

○医療関係者や大学教授による講話や認知行動療法を通して、参加者がこれまでの自分のネットやゲームとのつきあい方を見つめ直し、つきあい方について具体的な目標をもって生活するきっかけづくりをすることができた。使用時間や他の活動にも目を向けるようになった参加者もいた。特に使用時間については、参加者全員が、意識するようになった。

○参加者の保護者は、キャンプ後のネットやゲームの利用について変化を感じている。また、キャンプでの講話・交流により、保護者自身が、子どもへの声のかけ方や、見守る姿勢に変化が生じ、親子関係の好転がアンケートの記述から伺えた。

課題と今後の展望

○保護者や学校関係者、青少年育成関係者を対象とした講話等により、ネット・ゲーム依存の未然防止のための約束づくりや依存が疑われる初期の対処について理解を深めていく。

○本事業について、県内の関係機関に周知するとともに、事業成果を広めていくことで、市町村の青少年育成関係機関への事業の広がりを作り出せるようにしていく。

つながりキャンプ (静岡県)

～ネットをちょっと一休み 新しい自分を探しに～

ネットの利用を見直したい小中学生を対象に、野外活動や認知行動療法、カウンセリング等を取り入れた自然体験回復プログラムを実施することにより、ネットの利用を自分でコントロールする力を養い、生活改善のきっかけとする。

【企画運営会議】
 委員長 長澤弘子
(特任)浜松子どもメディアリテラシー研究所 理事長

委員 松田直子(特非)イーランチ 理事長
 松井一裕(医療法人十全会聖明病院 公認心理師)
 鈴木 真(県校長会 副会長)
 宮下修一(県PTA連絡協議会 会長)
 鈴木俊輔(国立中央青少年交流の家 企画指導専門職)
 県健康福祉部(障害福祉課、県精神保健福祉センター)
 県教育委員会(義務教育課、高校教育課、特別支援課)

事務局 県教育委員会社会教育課

事業の概要

- つながりキャンプ
 - ①プレキャンプ 9月2日(土)～3日(日)1泊2日
 - ②メインキャンプ 10月8日(日)～9日(月)1泊2日
 - ③フォローアップキャンプ 11月11日(土)～12日(日)1泊2日
 - ・対象 ネット利用を見直したい県内の小学5年生～中学3年生
 - ・実施場所 国立中央青少年交流の家(静岡県御殿場市中畑)
 - ・参加者 プレ6名、メイン6名、フォローアップ7名
 - ・スタッフ 医療スタッフ(公認心理師、作業療法士)3名、講師(NPO)1名、看護師3名、大学生サポーター13名
- 企画運営会議(年間3回)
- 静岡県ネット依存度判定システム
- ネット依存対策情報交換会
- ゲーム障害・ネット依存対策ワークショップ
- 大学生や若者への啓発

事業のねらい

静岡県教育委員会では、携帯電話事業者と連携した講座や、家庭でのネット利用のルール作りを促す啓発事業等を行っているが、スマートフォンの所持率の上昇やネット利用の低年齢化、学校におけるGIGAスクール構想の進展など、青少年を取り巻くICT環境が急激に変化し続ける現状を踏まえ、NPO法人や医療関係者等との連携により本キャンプを実施し、ネットの利用を見直したい小中学生の生活改善を図る。
《キャンプの目的》インターネットやスマートフォンから離れた環境で、幅広い年代の仲間と一緒に野外活動や集団生活を共にしながら、認知行動療法やカウンセリングを通して、これまでの生活を振り返り、ネットの利用を自分でコントロールする力を養う。

事業の内容

1. プレキャンプ 令和5年9月2日(土)～3日(日)《1泊2日》

| | 午前 | | | | | 午後 | | | | | 夜 | | | | | | | | | | |
|-----|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------|------|----|------|----|
| | 6:00-7:00 | 7:00-8:00 | 8:00-9:00 | 9:00-10:00 | 10:00-11:00 | 11:00-12:00 | 12:00-13:00 | 13:00-14:00 | 14:00-15:00 | 15:00-16:00 | 16:00-17:00 | 17:00-18:00 | 18:00-19:00 | 19:00-20:00 | 20:00-21:45 | 21:45-22:00 | | | | | |
| 1日目 | | | | スタッフミーティング | | 昼食 | 受付 | 開講式 | アイスブレイク | 野外活動【所内オリエンテーリング】 | | | | | タベのつどい | 夕食 | 認知行動療法 | 自由時間 | 入浴 | 消灯準備 | 就寝 |
| 2日目 | 起床・整理整頓 | 朝のつどい | 朝食 | 退所点検 | 認知行動療法 | 創作活動【富士山プレート】 | 昼食 | 自由時間 | アンケート | 終わりの会 | 解散 | | | | | | | | | | |

2. メインキャンプ 令和5年10月8日(日)～9日(月)《1泊2日》

| | 午前 | | | | | 午後 | | | | | 夜 | | | | | | | | | | |
|-----|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------|----|------|------|----|
| | 6:00-7:00 | 7:00-8:00 | 8:00-9:00 | 9:00-10:00 | 10:00-11:00 | 11:00-12:00 | 12:00-13:00 | 13:00-14:00 | 14:00-15:00 | 15:00-16:00 | 16:00-17:00 | 17:00-18:00 | 18:00-19:00 | 19:00-20:00 | 20:00-21:45 | 21:45-22:00 | | | | | |
| 1日目 | | | | スタッフミーティング | | 昼食 | 受付 | はじめの会 | アイスブレイク | 野外炊事【カレー作り】 | | | | | 自由時間 | 大学生企画 | 認知行動療法 | 入浴 | 自由時間 | 消灯準備 | 就寝 |
| 2日目 | 起床・整理整頓 | 朝のつどい | 朝食 | 退所点検 | 認知行動療法 | 野外活動【チャレンジ・ザ・ゲーム】 | 昼食 | 情報モラル講座 | アンケート | 終わりの会 | 解散 | | | | | | | | | | |

本事業の問い合わせ先

静岡県教育委員会社会教育課 青少年指導班 〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9番6号
 TEL 054-221-3312 FAX 054-221-3362 E-mail kyoui_shakyo@pref.shizuoka.lg.jp

POINT1

人とのつながり、自然とのつながり
 集団生活を共にしながら、オリエンテーリング等の野外活動や創作活動など多様な体験活動を実施した。また各キャンプ初日には、アイスブレイクを行うなど、参加者同士がリラックスして参加できるよう努めた。

POINT2

専門性を生かした医療プログラム
 カウンセリングや講座を通して参加者・保護者の悩みを聞き、生活改善に向けて助言した。認知行動療法では、個人の振り返りに加え、ゲーム形式でスタッフと一緒に取り組むなど、参加しやすさも重視した。

POINT3

キャンプ経験のある大学生サポーター
 県の野外活動スタッフ養成研修を修了した大学生を中心に参加を呼びかけ、プログラムと一緒に楽しんでもらうことで、参加者が安心して元気に活動できる雰囲気づくりを心掛けた。

3. フォローアップキャンプ 令和5年11月11日(土)～12日(日)《1泊2日》

| | 午前 | | | | | 午後 | | | | | 夜 | | | | | | | | |
|-----|-----------|-----------|-----------|------------|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------|----|
| | 6:00-7:00 | 7:00-8:00 | 8:00-9:00 | 9:00-10:00 | 10:00-11:00 | 11:00-12:00 | 12:00-13:00 | 13:00-14:00 | 14:00-15:00 | 15:00-16:00 | 16:00-17:00 | 17:00-18:00 | 18:00-19:00 | 19:00-20:00 | 20:00-21:00 | 21:00-21:45 | 21:45-22:00 | | |
| 1日目 | | | | スタッフミーティング | | 昼食 | 受付 | はじめの会 | アイスブレイク | 認知行動療法 | 講座(参加者) | タベのつどい | 夕食 | 準備 | キャンプファイアー | | 入浴 | 消灯準備 | 就寝 |
| 2日目 | 起床・整理整頓 | 朝のつどい | 朝食 | 退所点検 | 創作活動【フォトスタンド】 | 昼食 | アンケート | 閉講式 | 解散 | 保護者講座 | | | | | | | | | |

- ・認知行動療法、カウンセリング、講座は、医療法人十全会聖明病院(県の依存症治療拠点機関)が実施した。
- ・メインキャンプ2日目の情報モラル講座は、企画運営会議委員長 長澤弘子氏が実施した。
- ・各キャンプの開始前、1日目終了後、2日目終了後に全スタッフが集まり、プログラム内容や活動の狙いを確認するためスタッフミーティングを行った。
- ・野外炊事やキャンプファイアーなど会場である国立青少年交流の家のプログラムを活用し、普段では体験できないような野外活動や創作活動を実施した。
- ・参加者が自発的、主体的に考えて行動ができるよう、プログラムの間には多く自由時間を設けるようにした。
- ・アイスブレイクや大学生企画などの時間は大学生サポーターが主体となって企画・運営し、大学生にとっても指導者の立場として成長する機会を設けた。
- ・朝のつどいやタベのつどいなど決められた時間に他団体と一緒に行動するような時間もあり、施設内のルールやマナーを守り生活した。



事業のねらいに対する成果

- キャンプ前後のネット依存度判定の結果を比較すると、参加者の大多数で、依存リスクが改善した事例が見られ、カウンセリングを通してゲームの優先度が下がり、周囲の対人関係を優先するといった変化が見られた。
- 野外活動を通して、仲間と相談したり同じ目的を達成したりする体験ができ、ネットやゲームでは得られない充実感があつた。また、集団生活を通して、基本的な生活習慣や社会的ルールやマナーに対する意識の変化が見られた。
- 認知行動療法やカウンセリング等により、これまでの生活を振り返り、今後の自分を変えるきっかけとなった。
- 「対話をする」、「ルールを見直す」等子どもだけではなく、保護者のネットやスマホの使い方にも意識の変化が見られた。

課題と今後の展望

- 事務局がスタッフや大学生サポーターに対し、参加者への指導方法など、求めている方向性を事前に明確化するため、スタッフミーティングの時間を確保する。
- 子どもたちが家庭を離れる精神的負担や活動による体力的負担を考慮し、移動時間なども含め時間に余裕がある活動プログラムを検討する。また、子どもたちの主体性を高めるため、自由時間を多く確保する。
- 外部講師を依頼するなど、普段の生活では体験できないような経験が積める体験活動を検討する。
- 今後、さらに新規参加者の人数を増やしていくため、今回のキャンプの結果を広報するとともに、引き続き学校や地域、医療・福祉関係機関等と連携し、参加者の募集を図っていく。また、県内教育施設や各市町にも広報を行い、事業のさらなる展開を目指していく。

デジタルデトックスキャンプ(山梨県)

ストレスや不安への対処、暇つぶし的手段としてのゲームやインターネットの過剰利用を避けるため、自然体験活動や回復者の体験談、ゲーム・ネット依存に係る学習などを盛り込んだ「メインキャンプ(3泊4日)」及び「フォローアップキャンプ(1泊2日)」を実施。

(実行委員会の構成)(50音順、敬称略)

- 長田 圭介((一社)ヴァンフォーレススポーツクラブ
スポーツクラブマネジャー)
- 坂本 拳 ((一社)グレイス・ロード生活支援員)
- 志田 博和(山梨県立精神保健福祉センター所長)
- 清水 康邦(山梨県福祉保健部健康増進課長)
- 平賀 貴久子(山梨県教育庁生涯学習課長)
- 山中 達也(山梨県立大学人間福祉学部准教授)
- 山本 芳衣(合同会社manabiya代表社員)
- 依田 賢太郎(山梨県立北病院公認心理師)

事業の概要

- ①メインキャンプ
 - ・日 程:令和5年7月27日(木)~30日(日)
 - ・会 場:みのぶ自然の里(山梨県南巨摩郡身延町)
 - ・参加者:男性5名(中学2年生1名、中学3年生4名)
 - ・サポーター:女性5名(山梨県立大学4年生)
- ②フォローアップキャンプ
 - ・日 程:令和5年11月5日(土)、5日(日)
 - ・会 場:みのぶ自然の里(山梨県南巨摩郡身延町)
 - ・参加者:男性5名(中学2年生1名、中学3年生4名)
 - ・サポーター:女性5名(山梨県立大学4年生)

【フォローアップキャンプ】

- ・1日目(11/4)
 - 10:30 集合
 - 10:45 オリエンテーション(始まりの会、講師紹介)
 - 11:00 一般社団法人ヴァンフォーレススポーツクラブワーク(親子ヨガ)※保護者も参加、12:30 昼食
 - 13:30 一般社団法人ヴァンフォーレススポーツクラブワーク(リズム運動、短距離走時間計測)
 - 15:45 農作業体験(タマネギ種植え)
 - ※ヴァンフォーレ甲府選手交流(夕食まで)
 - 17:00 夕食(BBQ、ピザ作り、ほうとう麺作り)・片付け
 - 20:00 肝試し、20:30 振り返り
 - 20:45 入浴・自由時間、22:00 消灯
- ・2日目(11/5)
 - 6:15 起床・散歩(ダイヤモンド富士見学)、8:00 朝食
 - 9:00 山梨県立北病院ワーク(ネット・ゲームリテラシーグループミーティング~ネット・ゲームと楽しく付き合おう~)
 - 10:10 一般社団法人グレイス・ロードワーク(感情対処の仕方とライフスキルを身につける)
 - 11:05 創作活動(竹とんぼ作り)、11:35 農作業体験(柚子収穫)
 - 11:50 昼食(キャンプ飯;食材選びからメニュー決定)、13:45 片付け(部屋、リネン類)
 - 14:00 振り返り(キャンプを通して今後の生活について、今後の夢について)
 - 15:00 終わりの会・解散



事業のねらい

厚生労働科学研究報告書によると、中高生のネット依存が疑われる者は、H24年の52万人からH29年の93万人へと急増。
本県がR3に行ったゲーム・ネット利用状況に関する調査において、ネット開始年齢が早いほど利用時間が長時間になること、ネット依存のスクリーニング項目に該当する者はネット開始年齢が早い傾向にあること、平日より休日の方がゲーム・ネット利用時間が長い傾向にあることが示された。
また、本県で唯一ゲーム・ネット依存専門プログラムを提供している医療機関において、ゲーム・ネット利用の理由に関する調査を行ったところ、「ストレスを避けるため」、「悩みや不安を忘れるため」、「暇つぶし」などが挙げられた。キャンププログラムを通して、自己肯定感やコミュニケーションなど生活スキルの向上及びゲーム・ネット以外の興味の獲得による目的外のデジタル機器の利用時間の減少につなげる。

事業の内容

- 【メインキャンプ】
- ・1日目(7/27)
 - 13:00 集合
 - 13:15 オリエンテーション(施設説明、自己紹介)
 - 14:00 森林ワーク(薪割り、小枝拾い)
 - 15:30 ヴァンフォーレ甲府選手との交流(芝滑り、モルック、ボール運動、夢実現に向けた講義)
 - 18:00 夕食(パエリア作り、後片付け)
 - 20:30 振り返り、21:00 入浴・自由時間、22:00 消灯
- ・2日目(7/28)
 - 7:30 起床・散歩、8:00 朝食・片付け
 - 9:00 精神保健福祉センター所長講義(依存ってなんだらう?「好き」と「依存」と「依存症」)
 - 10:45 山梨県立北病院ワーク(ネット・ゲームリテラシーグループミーティング~ネット・ゲームと楽しく付き合おう~)
 - 12:30 昼食(ピザ窯体験)、14:30 運動(ウォーキングラリー、バスケットボール、バドミントン)
 - 18:00 夕食(カレー作り、火起こし)・片付け、21:00 振り返り、21:15 入浴・自由時間、22:00 消灯
- ・3日目(7/29)
 - 7:30 起床・ラジオ体操、8:00 朝食・片付け
 - 9:30 山梨県立北病院ワーク(ネット・ゲームリテラシーグループミーティング~ネット・ゲームと楽しく付き合おう~)
 - 11:15 一般社団法人グレイス・ロード体験談(「依存症」と「生きづらさ」について考える)
 - 12:30 昼食(おにぎり体験)、14:00 農作業体験(雑草抜き、トムモロコシ収穫)
 - 16:30 夕食(BBQ、薪割り、火起こし)、19:30 花火、20:30 振り返り、21:00 入浴・自由時間、22:00 消灯
- ・4日目(7/30)
 - 7:30 起床・ラジオ体操、8:00 朝食・片付け
 - 9:00 山梨県立北病院ワーク(ネット・ゲームリテラシーグループミーティング~ネット・ゲームと楽しく付き合おう~)
 - 10:45 農作業体験(トマト・唐辛子収穫)、12:00 昼食
 - 13:30 TIS株式会社ワーク(社会を変えるお金の使い方!中学生のためのネット課金)※保護者も参加
 - 15:30 終わりの会(振り返り、フォローアップキャンプの案内)、16:00 解散

POINT1 生活

不規則な食生活や睡眠習慣の改善を図るため、仲間とともに準備から片付けまで行う事により、食事が楽しく3食摂取することが大切であること及び運動など身体活動を取り入れ質の高い睡眠をとることの重要性の理解につなげた。

POINT2 興味の獲得

ストレスコーピングや余暇時間の有効活用手段の獲得のため、運動、料理、自然体験活動など多様な体験の場を設定。特に運動については、プロスポーツクラブの協力により、体を動かすことの楽しさを実感する機会を設定。

POINT3 夢実現

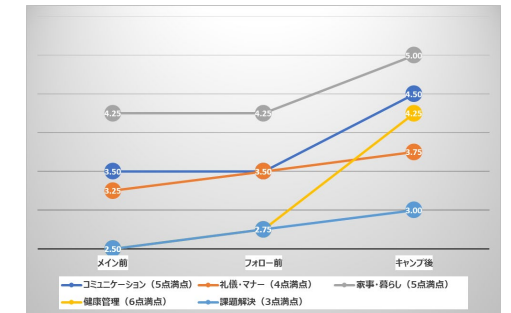
各講師や学生サポーターがキャンプに帯同し、大人とのコミュニケーションの時間を確保。キャンプ後の生活や将来の夢・目標を考える機会を設けた。プロサッカー選手との交流を通して、苦しい時があること、人生を楽しむことの重要性の理解につなげた。

事業のねらいに対する成果

参加者の評価については、依存傾向を日本語版Diagnostic Questionnaire(DQ)及びゲーム依存度を測定するGAMES test(GEMES)により、生活習慣等の変化を国立青少年教育振興機構が実施した「子供の生活力に関する実態調査」(平成27年5月)において抽出された5因子23項目からなる生活スキルを活用し、いずれもメイン前、フォローアップ前、事業終了2か月後に測定した。
依存傾向については、DQ及びGAMESの平均値の変化は表1のとおりとなり、いずれも改善がなかった。
生活スキルについては、各項目について「できる-できない」の2件法で、「できる」を1点と得点化し、平均点を算出し、図1のとおりとなり、いずれのスキルにおいても改善が認められた。

表1

| | メイン前 | フォロー前 | キャンプ後 |
|-------|-----------|-----------|-----------|
| DQ | 2.5 ± 1.7 | 3.5 ± 2.7 | 3.5 ± 1.3 |
| GAMES | 3.3 ± 1.7 | 4.5 ± 3.7 | 3.8 ± 2.8 |



課題と今後の展望

15人定員に対し、5名だけの応募となり、教育委員会等とも連携し、事業周知を行ったが、集客に課題を残した。参加者は事業実施前より依存傾向が少ない参加者であったが、事後アンケート内でも「ゲーム・ネット利用状況に変化はない」との意見が散見され、利用方法の見直しには至らなかった。一方で「コミュニケーションや生活状況に変化が見られた」との、保護者の声もあることから、生活習慣の改善には一定程度の効果があると推察される。

本事業の問い合わせ先：山梨県 福祉保健部 健康増進課
〒400-8501 山梨県甲府市丸の内一丁目6番1号、TEL 055-223-1495

人とつながるオンラインキャンプ2023（兵庫県）

青少年のインターネット依存防止の一環として、日常生活でのネット利用を見直したい青少年を対象に、ネットから離れた自然体験等を行うキャンプを実施し、ネット依存の実態や回避策等を調査・研究し、広く啓発する。

（「青少年のネットトラブル防止大作戦」推進会議の構成員）

- ・兵庫県立大学環境人間学部 竹内 和雄 教授【座長】
- ・神戸親和大学教育学部 金山 健一 教授
- ・神戸大学大学院医学研究科 曾良 一郎 特命教授
- ・幸地クリニック
- ・兵庫県立神出学園
- ・（一財）野外活動協会
- ・淡路市ICTクラブ協議会
- ・あわじ次世代テック推進会
- ・兵庫県PTA協議会
- ・阪神南こころ豊かな人づくり委員会
- ・東播磨青少年本部
- ・(株)サンテレビジョン
- ・日本放送協会神戸放送局
- ・(株)神戸新聞社
- ・(株)朝日新聞社阪神支局
- ・(株)ドコモCS関西神戸支店
- ・(一社)いえしま自然体験協会
- ・兵庫県教育委員会事務局教育企画課
- ・神戸市教育委員会事務局学校教育部学校教育課
- ・兵庫県警察本部サイバー企画課、少年課
- ・兵庫県県民生活部男女青少年課
- ・(公財)兵庫県青少年本部【事務局】

事業の概要

- 1 オリエンテーション（参加者選考）
 - 2 本キャンプ
 - 3 フォローアップキャンプ
- ・対象者：日常生活でのネット利用を見直したい、原則として県内在住の青少年(小学5年～18歳以下)
 - ・応募者：45名
 - ・参加者：20名（小5～高1）
 - ・会場：兵庫県学校厚生会館（神戸市中央区）
兵庫県立いえしま自然体験センター（姫路市家島町）
 - ・主催：(公財)兵庫県青少年本部、兵庫県
(一社)ソーシャルメディア研究会
 - ・共催：「青少年のネットトラブル防止大作戦」推進会議
 - ・コーディネーター：兵庫県立大学環境人間学部 竹内 和雄 教授
 - ・アドバイザー：神戸親和大学教育学部 金山 健一 教授
神戸大学大学院医学研究科 曾良 一郎 特命教授
幸地クリニック 中元 康雄 精神保健福祉士
神戸常盤大学保健科学部 西村 充弘 講師
 - ・メンター・サポーター：(一社)ソーシャルメディア研究会 18名
 - ・技術協力：(株)ドコモCS関西神戸支店

事業のねらい

- ・人とつながりを感じながら、野外炊事やカヌー等の自然体験活動に参加することで、リアルの充実を感じるとともに、他の参加者や大学生との交流を通じて、自身のネット利用等の日常生活を振り返り、今後の目標を立てることで、自身の行動変容を促すきっかけとする。
- ・ネット問題の背景には、現実社会での様々な問題が原因となっていることがわかっており、問題の解決には参加者だけでなく家族で取り組む必要があることから、保護者会をはじめとした保護者向けプログラムのさらなる充実を図り、青少年のネット依存の予防方策等の研究を深める。
- ・関係機関の連携により、教育目的として、ごく普通の子ども達がネット依存を回避し、ネットとうまく付き合うための方策を確立するとともに、関係者それぞれの役割を明確化し、持続可能な体制の構築に取り組むことで、他地域での実施を促進する。
- ・過去参加者アンケートを継続実施し、より正確な事業検証に基づく事業の改善や本事業の成果に基づく新たな施策の展開を図る。
- ・過去参加者がスタッフ（メンター・サポーター）や自身の経験を語る先輩としてキャンプに戻るシステムを構築することで、プログラムや個別エピソードの収集による事業検証の充実を図る。

事業の内容

1 オリエンテーション（参加者選考） 日時：令和5年7月9日（日） 場所：兵庫県学校厚生会館

| 時 | 13 | 14 | 15 |
|---|----------|----------------|------------|
| 分 | 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 |
| | 開会式 | 家族会 ワークショップ | 閉会式 |

…保護者向けプログラム

①



②



①家族会
②ワークショップ

POINT 1

■保護者プログラムの充実

問題の解決には、参加者だけではなく、家族で取り組む必要があることから、全3回の保護者会を開催した。会では、ネット依存外来を開設しているクリニックの精神保健福祉士によるネット依存に関する講義や子どもへの関わり方の意見交換等を実施した。

POINT 2

■スマホ部屋の設置

電波の届きづらい島の中で、ネットを利用できる環境（スマホ部屋）を整備し、1日1時間のフリータイムにスマホやゲーム機を「使うか」、「使わないか」を考え、選択できる機会を提供した。

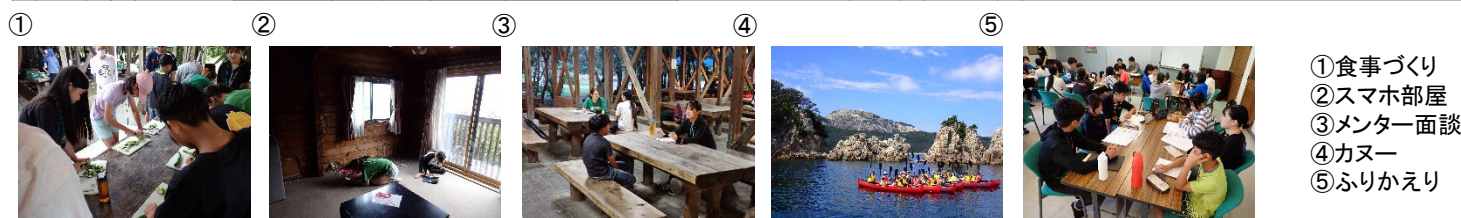
POINT 3

■過去の参加者からのアドバイス

過去参加者がキャンプに参加した経緯や思い出、現在の状況、参加者に対するアドバイスを聞いた。キャンプを変化のきっかけにした先輩を身近に感じてもらった機会を提供した。

2 本キャンプ 日時：令和5年8月16日（水）～20日（日） 4泊5日 場所：兵庫県立いえしま自然体験センター

| 日 | 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|----|------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|-----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 時 | 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 | 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 | 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 | 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 | 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 |
| 分 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 |
| 内容 | 集合・乗船、姫路港↓いえしま、移動、はじめの会、昼食、保護者面談、家族会、移動、乗船、いえしま～姫路港、解散、夕食、ふりかえり、メンター面談 | 朝食、チームビルディング、フリータイム、昼食、釣り、フリータイム、夕食、ふりかえり、メンター面談 | 朝の集い、海水浴、スイカ割り、シャワー、昼食、ふりかえり、フリータイム、移動、坊勢島、移動、夕食、入浴 | 朝食、カヌー、着替え、昼食、昼寝、フリータイム、ふりかえり、夕食、キャンプファイヤー、入浴 | 朝の集い、朝食、目標の共有、ふりかえり、写真立てづくり、昼食、おわりの会、移動、乗船、いえしま↓姫路港、解散式、夕食、ふりかえり |



①食事づくり
②スマホ部屋
③メンター面談
④カヌー
⑤ふりかえり

3 フォローアップキャンプ 日時：令和5年11月12日（日） 場所：兵庫県立いえしま自然体験センター

| 時 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
|----|------------|-------------|------------|--------------|------------------|------------|-------------|------------|------------|----|
| 分 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 15 30 45 | 0 |
| 内容 | 姫路港集合 | 魚釣り、移動、個人面談 | 移動、はじめの会 | 家族会、保護者面談、昼食 | 家族会、メンター面談、ふりかえり | おわりの会 | 移動、いえしま↓姫路港 | 解散式 | | |

…保護者向けプログラム

①魚釣り
②目標発表

事業のねらいに対する成果

- ・大自然の中で全力で活動する楽しさや現実世界で人とつながることの良さを参加者自身が感じ、考える機会を提供することができた。
- ・1日1時間、好きなことができるフリータイムの中で、スマホやゲーム機を「使うか」、他の遊びをするかを自分自身で考え、選択する機会を提供できた。
- ・ネット問題や参加者との関わり方について、家族会やコーディネーター等との面談など保護者プログラムの実施により、参加者だけでなく家族で考えることの重要性への理解を深めることができた。
- ・過去参加者が先輩としてキャンプに戻り、参加経験者でしか語ることができない思いや経験を伝える機会を通じて、今後の自分の姿を具体的にイメージするきっかけづくりにつなげた。

課題と今後の展望

- ・定員20名のところ、45名の応募があり、キャンプに参加できない申込者がいたことから、これまでに培った知見やノウハウを横展開し、多くの自治体や団体で実施できるように広く啓発をする必要がある。
- ・過去参加者アンケートの結果を分析し、より良いキャンプのあり方を引き続き検討する。
- ・過去参加者がスタッフ（メンター・サポーター）や自身の経験を語る先輩として、参加者へ語る機会を設け、キャンプを通じて意識や行動が変わったきっかけをリアルな声として参加者に届け、刺激を与えられるような取組を継続する。

本事業の問い合わせ先

公益財団法人兵庫県青少年本部企画部（県民運動担当）
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1 兵庫県県民生活部男女青少年課内
Tel：078-362-3142 E-mail：danjoseishounen@pref.hyogo.lg.jp HP：http://www.seishonen.or.jp/

「薬物・ネット・ゲーム依存症とは」 岩手・長野・奈良教室

保護者や教育関係者、行政関係者、医療関係者、支援者、地域住民に依存症の背景や仕組み、予防や支援の方法についての正しい理解を深めてもらい、自分の問題として受け止めてもらうとともに、参加者を通じ、児童や地域社会に依存症に対する正しい理解をひろげる。

| 事業企画 | 検討委員会 |
|-------|----------------------|
| 小林 桜児 | 神奈川県立精神医療センター副院長 |
| 本間 史祥 | 子どものネットリスク教育研究会 研究員 |
| 藤田みどり | 茅ヶ崎地区更生保護女性会 |
| 加藤 武士 | 木津川ダルク 代表 |
| 近藤 京子 | 一般社団法人オンブレ・ジャパン 代表理事 |
| 黒川奈菜子 | 千葉菜の花家族会 代表 |
| 雨海須磨子 | 茨城ダルク家族会 会員 |
| 松井 由美 | NPO法人薬家連 副理事長 |
| 川上 文子 | NPO法人薬家連 副理事長 |

事業の概要

- ①「薬物依存症とは」「ネット・ゲーム依存症とは」というテーマで医療従事者・研究者が講演
 - ②ネット・ゲーム・薬物依存当事者と家族の体験談等伝える
 - ③パネルディスカッションで開催地域の依存症問題の取組みを発信してもらい参加者との交流を図る
 - ④アンケートで講演前と後の意識の変容を調査
- ☆対象者
教育関係者・医療関係者・行政司法関係者
・支援者・当事者・家族・地域住民
- ☆実施地域
岩手・長野・奈良

事業のねらい

“ダメ。ゼッタイ。”の視点だけの予防教育だけでは、薬物に手を出してしまった若者やその家族を地域から孤立させ、医療につながる道を閉ざしかねず、地域社会の回復力を逡減させていきます。

また、ネット依存やゲーム依存の広がり大きく、保護者は大きな不安を抱えています。

そのような中で、薬物依存とネット・ゲーム依存をテーマに「依存症予防教室」を開催。

回復の困難さとともに依存症は回復できる病であることを伝え、地域の相談支援体制の重要性への理解を促し、地域の予防教育資源である保護者・教育関係者・医療関係者・行政司法関係者・支援者・当事者・家族・地域住民等の連携の一助になることを目指す。

事業の内容

- 教室開催日時・場所**
- 依存症予防岩手教室 8月27日(日) アイーナいわて
 - 依存症予防長野教室 10月29日(日) 長野生涯学習センター
 - 依存症予防奈良教室 12月3日(日) 奈良春日野国際フォーラム

参加者数 岩手96名、長野68名、奈良73名 合計237名

プログラム 13:30~17:00

- 1 薬物依存当事者の体験談ー仙台ダルクスタッフ、藤岡ダルクスタッフ、奈良ダルクスタッフ
- 2 ネット・ゲーム依存当事者ー FISH代表、グレイス・ロードスタッフ
- 3 薬物依存者家族の体験談ー茨城家族会会員、群馬家族会会員、菜の花家族会会員
- 4 「ネット・ゲーム依存とは」 本間史祥 (ネットリスク教育研究会筆頭副代表)
- 5 「薬物依存とは」 小林桜児 (神奈川県立精神医療センター副院長)
- 6 開催地域の支援者等から依存症問題の取り組み状況や問題等を出していただき、上記5人と共にパネルディスカッションを行う。



長野教室

本事業の問合わせ先
 東京都足立区竹ノ塚 5-18-9-207
 NPO法人
 全国薬物依存症者家族会連合会
 電話：03-5856-4824
yakkaren@ck9.so-net.ne.jp
<http://www.yakkaren.com/>

POINT1
 依存症問題の専門家 登壇
 ネット・ゲーム依存問題では中学校の教諭である研究者が、薬物依存については第一線で支援や治療にかかわっている専門家が登壇し、依存の実態や捉え方や対応策を提供。

POINT2
 依存症に苦しんできた当事者や家族が登壇
 ネット・ゲーム依存や薬物依存の当事者・家族が、自らの苦しんできた体験を語り、回復の一步を踏み出すために周りや社会に何を求めるとかを発信。

POINT3
 パネルディスカッションで、双方向型の意見交換
 パネルディスカッションの冒頭、開催地の支援者・医療者等から開催地域での依存症問題の取組状況や課題について語っていただき、そこを議論の入り口に、依存症の予防に何が求められているのか、地域に理解と連携をどう深めていくかを議論。

| R5年度 依存症予防教室協力団体一覧表 | | | |
|---------------------|---------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 開催地 | 岩手教室 | 長野教室 | 奈良教室 |
| 後援団体 | 市・県・盛岡市教育委員会・県教育委員会 | 市・県・市教育委員会・県教育委員会 | 市・県・市教育委員会・県教育委員会 |
| 広告掲載 | 岩手日報 | 信濃毎日 | 奈良新聞 |
| チラシ配布先・依頼先 | 県・市・盛岡市立中学校(23校)・2保護観察所・7病院・更生保護団体・盛岡少年刑務所・ダルクや家族会等4団体 合計18団体 | 県・市・長野市立中学校(12校)・11病院・保護観察所・長野県学級保健会養護教諭部会・ダルクや家族会4団体 合計20団体 | 県・市・奈良市立中学校(22校)・県立高校(32校) 奈良市内24公民館(24か所)・保護観察所・8病院・ダルクや家族会等5団体 合計18団体 |
| ネット配信 | 岩手県薬剤師会・岩手県学校保健会養護教諭部会 合計2団体 | 長野県学校保健会養護教諭部会・長野県薬剤師会 合計2団体 | 奈良県薬剤師会・奈良県養護教育研究会・高等学校等養護教育研究会 合計3団体 |
| 連携協力団体 | 家族会・ダルク等 | 家族会・ダルク等 | 家族会・ダルク等 |
| チラシ枚数 | 9,545枚 | 9,882枚 | 8,240枚 |

3教室とも県・市と県・市教育委員会から後援を受け、関係機関を通じ依存症問題に取り組む方々や保護観察所通じ県内全保護司の方々、また会場地域の市立中学校の全教諭と全生徒の皆さん、依存症に取り組む病院や団体等3教室合わせ56団体にチラシ配布のご協力をいただくと共に、薬剤師会、養護教員会等ではネット配信のご協力を受け、また開催地域の家族会やダルクの力を

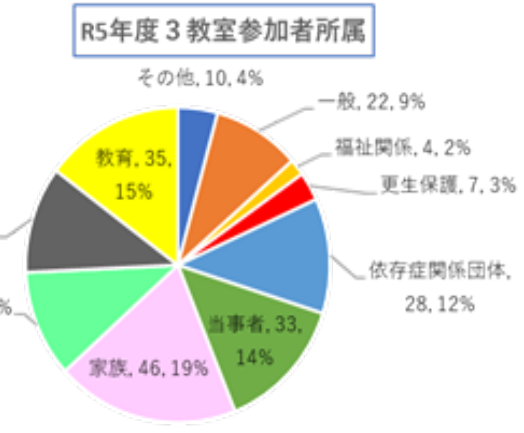


奈良教室

借り地元新聞に掲載を依頼等多くの団体の協力を得て取り組む。

事業のねらいに対する成果

- 1、参加者の所属は、237名中右グラフにみるように 家族19%、教育15%、当事者14%、依存症関係団体12% 行政・医療各11%
- 2、アンケート回答から、意識の変容が明らかに アンケートに回答151名(64%)
 「今までこのような講演会に参加したことがありますか？」
 「ない」68名 45.0%、「ある」83名 54.9%
 「今回の依存症予防教室はいかがでしたか？」について
 「大変参考になった」137名 91.9%
 受講前と受講後で、変化が大きかったもの
 1位:「依存症の自助グループについて知っていますか？」
 「あまり知らない」42.0%→9.4% 32.6%減
 2位:使用障害や依存症とはどういうものか知っていますか？」
 「よく知っている」が 12.6%→42.3% 29.7%増
 3位:「ゲーム等などがやめられないのは本人の意思の問題」
 「少し思う」が 36.0%→18.1% 17.9%減
- 3、アンケートには
 「また岩手で開催してほしい」「予防も大切だが、支援も大切。少し考えが変わった」「この企画に感謝している」「依存症の根底にあるのは人間関係なのだと感じた」「薬物乱用教育の今後の方針を考えることができた」「学校の薬物乱用防止教育で、更に依存への支援ができることを伝えていかないといけない」等々の意見が寄せられ、3教室とも参加者の依存症への理解が深まったことが分かった。



課題と今後の展望

2018年から16回の教室を開催する中で、依存症対策全国拠点機関の設置による依存症専門医療機関の増加や依存症地域連携モデル事業の広がりがあり、行政・教育・医療機関での依存症への取組みが進み、依存症についての学びや支援者の連携を求める声が高まってきているのを感じています。そのような中、「依存症予防教室」の開催の意義は大きなものがあると考えます。しかし、開催のためには多くの労力が必要です。当連合会は、年6000円の会費とボランティア・スタッフによって支えられている団体で、投じられる労力・財政力には限りがあり、引き続き依存症予防教室に取り組むことは困難です。当連合会のような自主団体がこの事業の委託を受けやすくなるよう、開催回数等事業の見直しを検討いただけたらと感じています。

みんなで考える依存症予防

～インターネット・ゲーム・スマホ・薬物など（公益財団法人横浜YMCA）

子どもたちを夢中にさせるゲームやインターネット等とどのようにつき合えばよいのか。健康被害、金銭トラブル、依存症の問題など実態や対策がよく分からず、多くの保護者が抱えている悩みである。そこで、依存症治療、体の使い方、思春期のメンタルケアの専門家をお招きし、各回対象をかえて、みんなで一緒に考えていく。

（実行委員会の構成）

- ＜委員長＞
笹田 哲（神奈川県立保健福祉大学）
- ＜委員＞
三原 聡子（国立病院機構久里浜医療センター）
森 昭憲（富山県リハビリテーション病院）
松橋 秀之（特定非営利活動法人さくらみらい横浜）
増谷吉太郎（児童養護施設 日本水上学園）
千足真理子（横浜市小学校教諭）
黒川恵理子（S.E.N.Sの会埼玉支部会）
田沼 美穂（公益財団法人横浜YMCA）
太田 聡（公益財団法人横浜YMCA）*事務局

事業の概要

普及啓発のための取組

【対象】

小学生・中高生・教育関係者・保護者/一般

【実施地域】

横浜市（ハイブリッド開催）

【日程】

- 第1回(1/5) 小学生対象
- 第2回(1/27) 教育関係者対象
- 第3回(2/18) 中高生対象
- 第4回(2/24) 保護者/一般対象

事業のねらい

私たちの生活に欠かせなくなったデジタル機器は、ゲームやネット配信のような娯楽だけでなく、仕事や学習、そして遠く離れた人と繋がる大切なツールにもなっている。一方で、学校生活・社会生活・健康に問題を引き起こす依存的な課題もでてきている。

私たちのクラスで出会う発達課題があったり、不登校の子どもたちの保護者からは、そのような依存に関わる相談が以前からあったが、コロナ禍に入ってより深刻度が増している。そこで一昨年から啓発活動、デジタルデトックスキャンプ、治療キャンプなど専門機関との協働を進め、依存症を正しく理解し、禁止ではなく「上手に付き合っていく方法」を一緒に考えていくことが重要かつ効果的であることが分かった。そこで本事業では、インターネット、ゲーム、スマホ依存を中心に、薬物依存も含めた依存症全体について、小学生、中高生、保護者/一般、教育関係者と4つの対象に分け実施し、それぞれが自分事として捉えて理解することを目的とする。

事業の内容

①小学生

- ◆予防につながる習慣を知る
- ◆体メンテナンス体操や運動を通して健康や体への関心を持つ
- 10:00-はじまりの会(オリエンテーション)
- 10:15-依存症治療の専門の先生のお話
- 11:00-休憩
- 11:15-からだの動かし方の専門の先生のお話
- 12:00-昼食
- 12:45-楽しく身体を動かそう(コーディネーション)
- 13:30-振り返り
- 14:00-終了



低学年の集中力を考慮し、1セッションを45分とした。セッション中も講師と会話をする時間を取る・動画を利用する・実際に身体を動かす時間を設けるなど、飽きずに参加できるように配慮した。

「楽しく身体を動かそう」のセッションでは、自分の身体をイメージ通りに動かすための運動(コーディネーショントレーニング)やゲームを行った。人と自分を比べる事なく自分のペースで楽しく運動する場を作ることで、学年差や運動の苦手さを超えて、各々が楽しみながら身体を動かす様子が見られた。

本事業の問い合わせ先

公益財団法人横浜YMCAオルタナティブ事業部
Tel 045-433-4321 E-mail: bl_info@yokohamaymca.org

POINT1

4つの対象に分けたセミナー
依存問題を「みんなで考える」のコンセプトで、まだ問題が大きくなる前の小学生、依存度が高まる時期の中高生と分けた。また子どもたちを取り巻く親や大人の意識が重要となることから、教育関係者と保護者/一般に分けて実施した。

②中高生

- ◆回復の困難さを理解する
- ◆今の自分の生活と照らし合わせて考える機会を持つ
- ・依存症のメカニズムを通して、依存症になった後の回復の難しさと同時に、回復できる病気であることを伝えた。
- ・アンケートの回答の中の「これから新たに取り組みたいこと」として、「デジタル機器の使い方に気を付ける」、「メンテナンス体操を実施する」、「今回知ったことを家族と話す」、「他の趣味を見つける」に回答

③保護者/一般

- ◆子どもとの具体的な関わり方を知り、依存的行動の背景にあるものを考える
- ◆依存症があることが差別することに繋がらないよう、依存症への理解を深める

④教育関係者

- ◆子どもへの伝え方や関わり方を知る
- ◆関連団体との連携方法を考える
- ②、③、④については、3名の専門家から30分ずつお話があり、最後に質疑応答を行った。ハイブリッド開催とし、アーカイブでの後日視聴も可能とした。

【参加者数】

- ①小学生:8名 ②中高生 当日23名・視聴回数123回
- ③保護者/一般 当日43名、視聴回数146回
- ④教育関係者 当日35名、視聴回数178回

事業のねらいに対する成果

①小学生

最後の振り返りでは、体メンテナンス体操を家族に教えたい、楽しかったなどの反応が多くあった。

②中高生

アンケートの「これから新たに取り組みたいこと」として、「デジタル機器の使い方に気を付ける」、「メンテナンス体操を実施する」、「今回知ったことを家族と話す」、「他の趣味を見つける」にマークが付けられていた。

③保護者/一般

理解が深まったことに「依存的な行動の背景を考えることが大切」という回答が97%と最も多く、自由記述欄からも子どもの問題ではなく大人の問題として、関わり方を考えていくという前向きな回答が多く見られた。

④教育関係者

依存的行動の背景や理由を考え、ただ禁止するのではなく、SOSのサインとして関わっていかうとする等、教育者の側の問題意識が深まった。

課題と今後の展望

①小学生について

年齢の壁は大きく、どの年齢の子どもにでも理解できるよう、低学年用・高学年用など、各年齢に合ったツールや手法の開発が必要だと感じた。小学1・2年生に理解できる説明用語の選定、分かりやすいスライドや図の工夫、時間設定など、早急に整える必要がある。

②中高生対象について

・講義自体には参加しているが、講義後のアンケート形式ではフィードバックを得るのが困難だった。講義中にフィードバック機会を作るなど、今回の形ではない別の方策を模索する必要がある。

③保護者/一般、教育関係者について

アンケート内容から、今回の内容を基礎としながらも、今後、具体例・実践例などを中心とした中級者向け研修会などの企画・運営も求められていると感じた。

POINT2

各分野の専門家が登壇
講師には、インターネット・ゲーム依存症専門外来の心理士、子どものメンタルケア専門の児童精神科医、作業療法士の大学教授をお招きし、お話を聞いた。各々の専門の視点から依存問題を考え、多方面の具体的なアプローチを聞いた。

POINT3

小学生向けプログラム
依存症のメカニズムなどの話の後に、予防につながる習慣を知る、健康や体への関心を持つことをねらいに、専門家が考案した「体メンテナンス体操」や「勝ち負けのない「コーディネーショントレーニング」を体験した。

